

文章思考力を高める添削法

—— 大学生のための添削指導法 ——

渡辺 知明

●はじめに

ある大学で文章添削の実践者のための講義をしました。準備をしながら驚いたことには、文章の書き方の本は数多くあっても、添削や推敲について書かれた本がほとんどないということです。そこで、わたしはあらためて、文章力の養成を、添削と推敲の角度から考えることになりました。2日間で通算7時間の講義の記録に手を入れて紹介します。(第1回2006・2・21、第2回3・7)

【連載】第1回

1 文章をよむこと

添削について書かれた本はほとんどありません。添削はたいへんな仕事ですし、添削について書くことはむずかしいからです。一般に考えられているように、誤字や文末の言いまわしなどを直すだけのことではありません。じつは文章について総合的な能力が必要なのです。

添削には、まず文章を正確に読む力が必要です。読む力がないと文章は直せません。ですから、添削の実践者の方には、文章を正確に読んでくださいという文章の読み方からお話しなければなりません。

文章をどのように読んで、文章をどのように直したらいいのでしょうか。添削においては、文章を直すのですが、

い点に特徴があります。アイマイな言い方をしているところは思い切って削ります。ですから、添削をされて怒る人もいます。わたしの通信講座でもブライドを傷つけられたような気持ちになる人がいるらしいのです。

まず最初に考えなければならないのは、何のために添削をするのか、このことです。添削の目的とは何でしょうか。もちろん、この学校での目的です。それは文章力の向上でしょう。それでわたしはまず、書き直しの重要さをあげます。添削したままではなく、必ず書き直しをして再提出してもらふことです。添削で返されたものをただ見ても、それでは文章の力は向上しません。

【連載】第2回

●声に出して読む

それでは、読み方からお話ししましょう。ここは総論ですから、大まかに2つの読みかたをあげておきます。

第1は、音読です。添削されたものを読むときには、文字言語と音声言語との関係が大切です。この二つを統一することです。添削するときには、文章を声に出して読むのです。わたしは通信添削の受講生に必ず、添削の赤ペンにしたがつて文章を読み直すようにしています。文章はもともと声の表現なのです。いい文章は声に出しても理解しやす

勝手に直してはいけません。文章のかたちは直しても、原文の内容を変えてはいけません。そのために、書き手の表現を正確に読まなければなりません。そして、どこまで表現できているか、どこがまずいからうまく表現できていないのか、読みとらねばなりません。しかも、書き手が意図しないことを書き加えたり、文章に表現されていない内容を付け加えてはいけません。ですから、正確に読むということは何よりも大事なことです。

ということ、これから、添削とは何かということを話したり、文章をどう直すかという技術的なこともお話ししなければなりません。さらに、添削者の文書力も問題になります。文章を書く力と文章を直す力は一体のものだからです。しかし、大前提となるのは、何よりも文章を正確に読む力なのです。文章のかたちの変化から意味の変化を知ることができます。原文に手を入れれば入れるほど別のものになってしまうことです。読点を一つ変えただけで意味がちがってしまふことさえあります。ですから読みの力が基本となるのです。

さて、ここに今回の課題について、みなさんの添削とわたしの添削とのコピーがあります。みなさんの添削とわたしの添削とではだいぶ違うところがあります。どこが違うと思いますか。どうですか。わたしの添削は削る部分が多

いものです。

声に出して読んで文章を書いた作家や文学者は大勢います。たとえばフランス文学では、フローベール、サン＝テグジュペリなどがそうです。日本の作家では、夏目漱石、太宰治、梶井基次郎などがいます。これらの作家の文章は、音声言語と文字言語と結びついている文章なのです。

フローベールは推敲するとき、いつも庭に出て決まった木の下で原稿を読み上げたそうです。目でよむときには拾い読みになりがちです。近ごろの学生たちは、国語の授業などでは、拾い読みをすれば解けるような問題を解いてきているのです。それに対して、拾い読みで読んでしまうのです。

目に頼って読んでいると言語能力が落ちてしまいます。実際に声を出して読んでみないと文章のよさが分かりません。たとえば、語句の前後を入れ替えただけで文のイメージが変わることはよくあります。しかし、黙読ではそれが感じられません。一般に文章は黙読されますから、目で見えて情報が拾えればいくらいに考えられています。それに対して、声に出して読むときには、文章のイメージや論理のつながりなどの重要さが理解できます。

たとえば、わたしは今日、みなさんにサン＝テグジュペリの書いた『星の王子さま』をお勧めします。ただし、二

〇〇六年に平凡社から刊行された稲垣直樹訳です。この翻訳の素晴らしさは文章のすばらしさです。翻訳の日本語のすばらしさです。それが原作のすばらしさを伝えていきます。訳者のあとがきは翻訳論ともいえるものです。それによると、フランス語は抽象的な言語で、三千語のことばが、英語ならば五千語、日本語ならば七千語に対応するのだそうです。ですから、わたしがこれまで読んだ他の訳者よりこともばが増えていきます。ことばに密度があります。

また、この人はフランス文学の「語り口」に関心を持って研究している人です。それで翻訳も原文の「語り口」を生かしたのになっています。一般的に文章には「語り口」というものがあります。どのような文章にもあります。たとえ学術論文でも、論文としての「語り口」がありますし、さらに研究分野ごとの「語り口」もあります。さらに、文学作品では、「語り口」が豊かになります。たとえば、落語や講談なども「語り口」として取り入れられます。

ところが、文章の「語り口」は目で読んでいる限りではなかなか分かりにくいものです。しかし、声に出して読むことによって分かるようになります。そのときに重要なのは、よみながら同時に意味が理解できるようにすることです。ですから、添削をするときにも、声に出して読むことをおすすめするのです。

前提にしていることは、学生の言語能力を向上させることです。これが最大の目的です。添削で点数をつけるわけではありません。書いた人に添削したものを返して、このように書けばいいのだな、このように直せるのだなと理解してもらおうことです。そうして、よい文章が書けるようになってもらうのです。

文章というものは、たとえレポートであっても、書いた人の思考の姿です。添削の原則としてよく言われるのは「削れ、削れ」ということです。新聞記事の文章指導はこれです。しかし、削るためには削れるだけの量が必要です。学生にはまずたくさん書かせなければなりません。そのためには、学生に何をどのように考えさせるかが前提です。書くことは考えることです。書くことで学生に考えさせるのです。

わたしは文章を書く人には、1・5倍から2倍は書きなさいと指導しています。二枚の原稿でしたら、下書きの段階で3枚以上を書くのです。それを削り込んで2枚にするのです。新聞記事の場合は、文章が書けることが前提です。削る指導が重点になります。確かにそれは正しいことです。しかし、一般の文章指導では、まず十分に書きこまねばなりません。考えをすべて出しつくすくらい書かなければなりません。それから削ればよいのです。考えを出

第2に、おすすめするのが、本に印しをつけながらよむことです。日ごろから習慣にしてください。そもそも、文章の理解とは、文章をそのまま飲み込むわけでありません。自分なりに文章を書きかえています。いわば、ある程度、添削しながら読んでいます。その手がかりが印しです。本をよむとき、わたしは必ず鉛筆を手にとって、印しをつけています。それで文章を分析して、内容を理解しやすくするので。それが文章を忠実によむというやり方なのです。

それが印つけよみです。2Bか3Bの柔らかい鉛筆を手にして文章に印しをつけてゆくの。マルとか、カッコとか、波線とかがつけられます。そうして、「ここは言い足りないな」とか、「ここは言いすぎだな」とか考えながら読んでいくのです。正確に読まなければ印しがつくれません。

それでは、このあたりから本題に入ります。

【連載】第3回

2 添削とはなにか？

添削とはそもそもなんでしょう。文字どおり「添(てん)と」(削(さく))です。つまり、文章に書き加えることと、文章を削ることです。添削にも目的があります。わたしが

しつくすことは当人がやらなければならないことです。そこに書き手の個性が発揮されます。添削は当人が書いたものに手を入れる二次的な作業なのです。

添削は、医学のたとえで言うならば、いわば対症療法です。大切なのは予防医学、病気になるための医学です。よい文章を書けるような日常的な指導が最も重要です。添削は学生の文章能力をつけるための一つの手段です。文章への添削を書き手にフィードバックして、次の文章を書くときの手がかりを提供することが目的です。わたしはそう考えています。添削の実践をする方もその点をお考えください。

もう一つ、添削によくあるのはコメント重視の傾向です。文章そのものの添削よりもコメントで済みます。しかし、コメントには実証性が欠けています。コメントがたくさんあると丁寧な添削だと思われるかもしれませんが。しかし、文章上達には有効性がありません。じつは、添削者にとつてはコメントを書く方が楽です。文章そのものに具体的に添削する方がよほど骨が折れます。よく書けている文章ほど添削はやさしいのです。書けていない文章ほど添削がむずかしいのです。

それではここで、自己紹介がてら、今回の添削実践者の方がたから、課題の3枚の文章に添削した感想をうかがい

ましよう。どれくらいの時間がかかりましたか。どんなところに苦労しましたか。そして、もう一つ、課題で書いて頂いた300字2枚の文章を書く時間はどのくらいでしたか。そのあたりをお話してください。

まず、Aさん、いかがですか。

——すぐには直さずに何回も読みました。5回くらい読みました。

それではどのような読み方をしましたか。音読ですか黙読ですか。

——黙読でした。

そうですか、黙読ですか。どんな黙読ですか。

【連載】第4回

●黙読の三種類

じつは黙読といっても読み方にはいろいろあります。基本は三つです。

第1が、目でよむ読み方です。文字から音(オン)を感じることなく、文字から直接に意味を理解する読み方です。わたしは「目(め)よみ」と呼んでいます。

第2が、声を意識してよむ読み方です。わたしは「音(おん)よみ」と呼んでいます。これは声に出してよむのと同じだけの時間がかかります。詩をよむときには、必ず

この読み方で、ゆっくり読んでください。詩のことばには密度があるからです。

第3は、文字づらを拾ってよむ読み方です。「拾いよみ」と呼びます。これは本のページをぎつと眺めるような読み方です。いわゆる「速読」です。

わたしは、添削をするときには「音よみ」をおすすめします。この黒板に書かれた文字をよむときには、わたしが黒板をたたく音と同じだけ時間がかかります。実際にやってみましょう。(ペンで文字に合わせて叩く)いかがですか、まったく声に出したときと同じ時間です。叩いた音から声のリズムも聞こえますね。これが大事なのです。

それでは、添削するのに時間はどのくらいかかりましたか。添削は字を書いている時間だけではなく、考える時間に多く費やします。考えている時間と、手を入れている時間と、総合計すると、おそらく3時間はかかるでしょう。1枚に1時間です。わたしでも、かなり時間がかかります。まず、書き出しの部分で時間を費やします。最初の5行くらいを読むと必ず、しばらく考えます。そこでだけ15分くらいかかります。文章全体へつながる内容が想像できるからです。

わたしの通信添削講座では、原稿用紙3枚の添削をして、コメントを書きますから一人当たり2時間くらいはかかり

ます。半ば研究のつもりで行っていますので、正直いって割のいい仕事ではありません。

では、Bさん。どうでしたか。

——高校生の英語の添削の経験があります。何回も読みました。最初は誤字を直しました。手を加えすぎると自分の文章になってしまうので、どこまで直していいのか迷いました。

仕上がるまで時間はどのくらいかかりましたか。

——半日ぐらいでしょうか。

ところで、ご自分の課題の文章を書くには、どのくらいかかりましたか。原稿2枚でどのくらいでしょうか。

——下書きをしてから清書まで、三時間くらいかかりました。

じつは、本を書くことはお金にはなりません。ベストセラーにでもならないかぎり、儲かることはないでしょう。

また、本を書くことでよくないことがあります。自分の考えを無理矢理まとめてしまうことです。常に発展途上にある研究者の考えには、毛糸のモヤモヤのようなものがあります。それが本にまとめるときには切り捨てられます。せっかくのアイデアや思考がそこで停止してしまいます。

●「感想」と「意見」

それでは、Cさん、いかがでしたか。

——最初、どこまで手を入れていいか、わかりませんでした。原稿には一枚に二時間くらいかかりました。

どこを直すか考えるとき、まず文章を正確によむことが重要ですね。わたしは本をよむときにも添削をしながら読んでいます。「印しつけ」がそれです。じつは誰でも、文章をよむときには、ある意味で添削をしながら読んでいます。添削をするつもりで読まないで、文章の意味も入っていないのです。

原稿を書くのに時間はかかります。一般にどのくらいかかると思いますか。原稿用紙一枚に二時間かかるというところだと思います。わたしもそのくらいかかります。書きはじめのころから変わりません。最初は恥ずかしい気がしました。

しかし、よく考えた原稿なら一枚に二時間かかるのは当たり前です。ところが、流行作家が「月に三百枚書く」などと発言するので、そんなものだろうかと思ってしまうのです。しかし、そんな原稿はそれなりのものです。直木賞の名がとられた直木三十五という人の文章などは、短い会話で次つぎに改行する小説です。「おぬし!」「なんだ」「うるさい!」というような短い会話がつながっています。

【連載】第5回

一度ご覧になってください。

ところが、それとは反対にほとんど改行をしないで書き継ぐ作家もいます。改行なしに、びっしり書かれています。そういう原稿もあるのですから、原稿用紙一枚に二時間かかるというのは、そんなに遅い方ではありません。

文章の手順全体を見れば、ずいぶん時間はかかるものです。はじめは草稿として一気に書いてしまいます。そのあとで、また書き込んでいくわけです。文章を仕上げていく過程は、いわば「自己添削」といえます。「自己添削入門」などという本があればいいですね。わたしも機会があれば書いてみたいと思います。

みなさんの添削の仕方と文章の書き方はよく似ています。添削でたくさん書き込む人は、自分の文章でも書き込んでいます。それは当然です。添削はその人の文章観に応じて行われるからです。そこに個性があります。

また、文章のジャンルごとに添削の基準がちがいます。新聞社では新聞記事の添削です。文芸関係ならば文芸関係の添削です。その目的によって添削の方法も変わります。その意味では、大学のレポートの添削についても基準が必要です。「この学校のレポートの目的はこういうものだ」「この大学の添削はこういう方法でやる」という基準が必要で、それが決まらなないと、よい添削はできません。

【連載】第6回

●文学文と理論文

そもそも文章は、大きく分けて文学文と理論文との二つの要素があります。文学文は小説や随筆など、理論文は論文や説明文などです。レポートはアイマイなジャンルですが、課題によっては、どちらかに重点が置かれます。「感想」ならば文学文、「意見」ならば理論文という具合です。文学文と理論文では、添削の仕方もちがいます。感想文ならば感じ方や好みですから、意味さえ分かればいので、添削は不要かもしれません。それに対して、小論文ならば添削すべきポイントがあります。

わたしは小論文の指導のときには、「事実」を書くことと、「意見」を書くことと厳密に区別します。試験のときでも、「事実」と「感想」ないし「意見」を区別して書かせます。「事実」については持参した新聞の切り抜き記事を書き写してもかまいません。情報として正確ならいいのです。しかし、「感想」と「意見」とは厳密に区別します。

「感想」には理由がありません。必要ではありません。当人が、そう感じたり、思ってしまったのですから仕方がないのです。それには「なぜなら」といった理由はつけられません。「りんごが好きです」ということに理由をつけ

今回、見せていただいた学生のレポートの中には、「要約をしないさい」という課題にもかかわらず、感想を書いている学生も少なからずいました。要約も、感想も、説明も、区別できないのでしょうか。そのあたりの基礎的な教育が必要で、日ごろから、「これは感想、これは意見、これは考え」と区別して語る必要があります。

ところで、みなさんは、「感想」と「意見」とをどのようにに区別していますか。これは大事なことです。いかがですか。「感想を書きなさい」と「意見を書きなさい」と言われた場合にどのようにに区別しますか。いろいろなちがいががあります。「感想」と「考え」と言い換えてもかまいません。いろいろな面から考えられるでしょう。いかがですか、Cさん。

——「感想」というのは、人の意見に対して発するものだと思います。

なるほど、そうですね。「感想」は受け身のものと言えますね。これらのことばはあまりにもよく使われるので、あらためて考える人は少ないと思います。しかし、添削者は、これをしつかり区別しなければなりません。「感想文」に対する添削と、「意見文」に対する添削とは方法がちがうからです。「感想文」ならば添削しなくてもよい点を、「意見文」で添削することもあります。

られますか。無理です。「バナナは嫌いです」について、「なぜバナナが嫌いなのか？」と問いつめても仕方ありません。感じや好みについては理由はつきません。

それに対して、「意見」ならば、理由がつけられます。むしろ付けなければなりません。論としての構造が必要です。「私は〇〇は何々だと考える。なぜなら、何々だからだ。というのは、何々だからだ」という三段の論理構造です。これが成立するかどうかは添削の基準になります。

さて、ここまでいろいろと話してきましたが、添削には、言語論があり、文章論があり、論理構造論があるのです。さらに、添削者の文学的なセンスもかわります。そういうわけで、わたしは講義のはじめに「添削はたいへんですよ」と言ったのです。その意味です。お分かりでしょうか。

それにも関わらず、添削を狭いところに限定してしまえばとても楽です。「添削とは文末の直しと、漢字の表記の直しです」とか、「原稿用紙の使い方について添削します」といったら簡単です。わたしの話しもすぐに終わってしまいます。しかし、わたしはそういう単純な話をするのは嫌いですから根本原則から話しているわけです。添削の細かい技術だけではおもしろくありません。添削というものは、文章について広く深い問題を含んでいます。むしろかしいといえ、たしかにむずかしいのですが、かえってそ

れだけおもしろいとも言えるのです。

さて、それでは、Dさん、いかがですか。

——最初に、小声で声に出して読んでみました。それから、どうしてよいのか分からないので夫に相談しました。すると、夫は、「大変だね」といいました。

——なぜこの課題の文書が出たのか分からないので困りました。考え方そのものについて添削をしてよいのかどうか迷いました。添削というものはどういうものかあらためて考えました。

【連載】第7回

●三読法と二読総合法

文章のよみ方といっても、いろいろあります。学校教育では、「一読法」という読み方と「三読法」という読み方があります。音でよむ読み方は一読法です。しかし、一般の学校教育では三読法をとっています。最初に軽くサラリと読みます。二回目で、細かく読みなさい。仕上げてもう一度読みなさいという指導方法です。通読、精読、味読、という三段階です。

それに対して、一読総合法という方法があります。児童言語研究会という国語教育の団体が開発した読み方です。じつは、普通の人はこの読み方なのです。たとえば、推理

小説をよむときに、終わりまでざっと見て犯人は誰が分かっているからあらためて初めからよむ人はいないでしょう。わたしの連れ合いは、本をべらべらめくって犯人を探してから読んでいます。犯人が分からないと落ち着いて読めないのだそうです。まあそういう読み方もあるでしょう。しかし、普通は頭から順に読んでいくのです。ところが、近ごろの文章は、目で見える文章に変わってきているので、拾い読みしても結構読めるのです。

内田樹『ためらいの倫理学』（2003角川文庫）という本の「矛盾」と書けない大学生」に、学生がなぜじつくり本が読めないのか文章力がないのかということについて書かれています。今の世の中では、拾い読みされる文章が多いのです。またにも頭から読んで耐えられる文章が少ないのです。一行一行じっくり読めない文章なのです。ですから、情報誌をよむように、知らないアーティストの名前や音楽の名前が出てきた場合には、そこを飛ばして読んでしまふのです。解らなくても飛ばし飛ばして読んでしまうのです。そのような読み方が今の若い人の常識になっているようです。解る情報だけ拾えばよいという読み方です。それに慣れてしまっています。要するに、読み流しの読み方です。

しかし、添削をする人はそれをやってはいけません。な

んとなく目に入ってくればいい文章なのかというところではありません。声と言うのは嘘をつけません。目はごまかされますが、声はごまかされません。以前から、ビジュアルな教育が流行していました。わたしは最初から反対でした。わたしはラジオ派でした。

文章力をつけるためには、学生にもラジオで落語を聞かせるのがよいでしょう。落語を聞いて笑えると言うのは言語能力の高さを示しています。テレビは視覚重視ですから思考力を低下させます。ビジュアルと言うのは、絵が並べば、それでわかったようなつもりになります。脳への刺激も言語より少ないのだそうです。

声で耳に入ってくる言語はごまかしがききません。意味が分からなければ、落語を聞いても笑えません。落語の場面転換などは理解がむずかしいものです。わかって笑える人は言語能力が高いのです。文学作品の朗読を聞かせるというのもよいでしょう。ただし、声の響きだけきかせる朗読というものがあります。これはいけません。本来の朗読はただ読み上げるだけではありません。声を聞かせるだけの朗読はいけません。また、アニメの声優のような朗読もいけません。洋画の吹き替えのような朗読もダメです。ことばの持つアリティに欠けています。本物の声ではありません。人間の存在感が感じられません。

良い文章というのは声が生きています。文章から声がイメージできます。たとえ理論論文であっても語り口があります。きちんと順序よく語られるように耳に入ってきます。

みなさんに共通しているのは、最初サラリと読んでそれから手をつけましたという読み方でした。確かに、見当がつかない場合にはそれが必要ですが、原則としてはよくありません。せいぜいサラリと見て、どんなジャンルの文章だろうとか判断するくらいに留めておきましょう。目が慣れてしまつと、文章の内容に対する批評力がなくなってしまう。また、文章の内容に対する先入観を作ってしまう。

書かれた文章が読み手の期待するようなものではないことがよくあります。わたしはいろいろな人の文章を見えますけれども、題名についてもこだわらない必要があります。期待にこたえるものではない場合は多いものです。題名と内容とは必ずしも直接関係ありません。いい題名のついてない場合がほとんどです。

学生のレポートでも同じです。文章は題名から書くのではなくて、題名が最後につく場合もあります。書き上げてからの確な題名がつけばよいのです。一般には、題名にそぐう内容を書くことが文章の課題となっています。そして、「この内容は題名から外れている」というような評価

がなされるのです。外れていてもいいではないですか。文章として完結した内容が書かれていればよいのです。それなのに題名から導かれる正解があるかのように批評されるのです。

わたしも文章論の本はたくさん読みますけれども、たいていおもしろくありません。それは出された題名に対して無難な内容を書くことが目標にされているからです。

【連載】第8回

●文章トレーニングと音声入力ソフト

それでは、Dさん、ご自分の書いた文章についてどのような感想をお持ちですか。

——何を書いてよいか迷っている時間がずいぶん長かったです。

わたしは、文章を書くための「文章トレーニング」という方法を工夫しています。いわば、出たとこ勝負で文章を展開する能力をつける方法です。一般に文章を書くというと、先にテーマを与える場合が多いのです。題やテーマからモチーフが生まれれば、良い文章が書けることもあります。しかし、モチーフがなかったら書けません。わたしは逆に形を与えます。たとえば、起承転結というものがありません。いろいろな文章の本に出ています。しかし、どんな

組み立てなのか、具体的には書かれていません。文章の形で実行できるように示されていません。わたしは接続を応用して、その形を作りました。接続語の組み合わせで起承転結が書けるのです。

たとえば、「私にとつての作文」というようなテーマから書きはじめるのです。一行書く。最終的には、一枚で良いのです。とにかく、モチーフがないから書きにくいのです。わたしのような話す仕事では、聞き手から一言、出ればそれに対してコメントできる能力が必要です。考えをその場で作らなければいけないのです。今、わたしはレジュメなど見ないで話をしています。レジュメは話をする前の準備作業です。レジュメは気にしないで話をしています。ですから、話に退屈したら、そこで話題を変えてしまえます。思いついたら話を外しても、また、もとへ戻ればよいのです。

そのようなやり方が文章の書き方だと考えたならば、人の文章を直すときの読み方も変わってくるのです。きちんと話が流れているかどうか、ここまで来たら具体例が欲しいなとか、具体例についてさらにコメントして欲しいなとか、読みながら考えが浮かびます。それが自然に展開できるのが言語表現能力です。出した課題に沿ってないからといって、書かれたことを消してしまつては、書き手に

とつてかわいそうです。書き手が考えたことそのものが評価されないということになります。でも、学生の言語能力向上にとつてはほめるべきことです。それを添削者が評価することが重要です。

学生の中には、基本的な課題から外れて自分の考えを展開する者もいるでしょう。わたしも、そのような学生でした。担当教授の使っている教科書を自分で買い求めて、それを自分で読んで、試験に臨みました。学生時代には、担当教授の書いた本について試験でも論じた覚えがあります。「先生の考えはここがおかしいのではないか」などと批評もしました。生意気な学生でした。今考えればきつとむちやくちやな内容だったと思います。しかし、何か考えようと思つて書いたのです。今では、わたしは人に教える立場になつていますが、そのような意見をもらうことは、自分自身で物を考える刺激になりますから、むしろありがたいことです。そういう発想もあるのかと考えさせられます。たとえそれが間違つた意見であつても、自分が、なぜそのような間違いをさせたのかということを考えるために意義があります。

それでは、Eさん、添削の時間はどの位でしたか。

——三時間ぐらいかかりました。記号のつけ方に迷いました。どこまで直していいのか困りました。

では、ご自分の文章については、どのくらいの時間がかかりましたか。

——半日ぐらいかかりました。

確かに時間がかかりますが、添削の仕事というのは、とてもいい仕事です。お金と時間のことは除外してのことです。わたしは今、添削について最高度のレベルの話をしていきます。そこまでやるのは無理かもしれませんが、全部ができなくても構わないのです。どこのレベルまでの添削をするのかを決めればよいのです。そのために、わたしは、策の最高レベルまでの話をしようと思つています。その中で添削の基準を決めて下されば結構なのヒヒヒです。具体的な技術についてはこの先に行つて話をすることにします。

それでは、最後にFさん、発言をお願いします。

——ずいぶん時間がかかりました。三日かかりました。一日目は、目で読みました。二日目から、赤ペンを持つて、自然に声を出しながら読みました。たとえば、「の」はどこにつながるのか考えながら、ゆっくり読んで、自分の頭の考えだけでいっぱいになってしまいました。原文をパソコンで打ち直すこともしてみました。

すごいですね。これは割りに合わないなと思いませんでしたか。極端なことになってしまうすと、添削は、「なん

だこれだったら、自分で書きなおしてしまった方が早いや」ということにもなるのです。添削の極致はそんなものです。これなら自分で書いてしまった方が早いと思うのは、自分で勉強になるということです。それを書き手にどうやってフィードバックするかということが、わたしの課題でもあります。今言えることは、とにかく添削したら、それに従ってもいいから、もう一度書きなおして提出してもらおうということですね。これは絶対におやりになるべきです。学生の義務としてです。そのときに、添削の方法に不満があったら、自分の考えに従って直せということです。添削者の指示は一つの修正案です。それで考え直してくださいということです。直す方法はほかにもたくさんあります。書き直したいという刺激をどのように与えるかが添削者の課題でしょう。

わたしもその点について研究中です。どのようなコメントを、どのような所で書けばいいか。わたしの添削の講座では、添削した文章を送るとき、四百字四枚くらい、コメントの文章をつけます。「何枚目の何行目のどこをどうしたらいいか」「何行目のこのことは入れ替えた方がいい」といった指示です。そこまで書くのですから、三枚の添削をするのに三時間はかかります。

みなさんにおすすめするのは、音声入力ソフトです。わ

たしが愛用しているのは「ドラゴンスピーチ」というソフトです。皆さんの中でお使いの方はいらつしやいますか。ここ一年くらいでずいぶん使いやすく なりました。わたしは、コメントの文章についてはほとんど音声入力で書いています。声を出す感覚と、文章を書く感覚とがこのソフトで一体になります。日本には口述筆記の伝統はありませんが、外国ではかなり普及しています。日本の作家の中でも、口述筆記をした作家がいます。たとえば、太宰治の「駆込み訴え」という作品は口述して、奥さんに書き取らせたそうです。先日の太宰治をモデルにしたテレビドラマでもそんな場面がありました。声の感覚と文字の感覚が一致することは素晴らしいことです。生き生きした文章が書ける条件です。しかも、話す力もつきます。

もう一つは、文章の前提として、喋れない人は文章が苦手です。喋るのが苦手な人は文章の上達も遅れます。大人でもそうです。わたしのようにたくさんしゃべる人はムダな文書を書きがちです。ですから、わたしはたくさん削ります。ただし、いま話がはずれているという自覚がありますから、また本筋に戻しますということができます。しゃべるといことは文章を書く前提です。たくさんしゃべることばが内化すると、黙って頭の中でことばを使って考えることができるようになります。それで、話さなくても文

章を書くことができるようになります。口数の少ない人はなかなか文章が苦手な場合が多いのです。まずは、しゃべる訓練が必要です。

【連載】第9回

●文章のかたちと内容

さて、これで六人の方々のお話が一通り終わりました。これから、レジュメの内容に触れながら具体的な話に入ることになります。一日目の後半として各論のお話です。

第一に、あらためて、添削とは何か、という定義をしておきましょう。添削とは、「文章に手を加えて、内容をより明確に、わかりやすく書き直すことである」ということになります。さらに、「文章を読んで理解すること、理解したことを的確な形式に表現することである」という基本的な定義ができるでしょう。

また、書き手が意図しない内容を添削者が表現してはいけない、ということもこれまで話しました。添削者には、正確に文章読解する能力とともに文章による表現力が求められます。ですから、添削する側が、添削することで鍛えられるということが重要です。毎回毎回、文章との真剣勝負なのです。

ところで、おもしろいことには、添削というのは、自分

の文章ではないから直すことができるのです。自分の文章と言うのは、書き手のモチーフを自分が背負いこんでいますから直せないのです。「ここは捨てられないな」とか、いろいろなものがあります。ところが、他人から見れば「それはいらないよ」とあつさり言われてしまいます。書き手には「そこは苦労したんだけれどなあ」という思いがあります。ところが、そういうところに限って、他人から見ればたいがいダメなところですね。「それはいらないよ」というようなところに、書き手は結構こだわっているのです。本人はこだわっていますが、あとになれば自分でも「そこはなくてよかった」と分かるのです。

第二に、添削の原則です。添削とは、あくまで形式の直しです。ところが、こわいことに、文章は思想の乗り物です。文章というかたちに思想が載っているのです。ですから、単に表面上を直しているだけではなくて、考えのあたりを変えてしまいます。語順を入れ替えただけでも考えが変わるのです。情動的な意味では変わらないかもしれませんが、その思想が変わるのです。価値が変わるのです。

たとえば、「わたしは食事は要らない」を、「食事は、わたしは要らない」と、ある語句を冒頭に持っていくだけで文の意味が変わります。使っている語句は変わりありません。それでも、意味はちがうのです。

かたちで思想が変わることが読み取れないといけません。同じことばが入っていれば意味が同じだという考えでは添削はできません。だから、よむ力が重要なのです。つまり文章の形式と内容は一体なのです。形式を操作することによって内容も変えているのだという自覚が必要です。

【連載】第10回

●エネルギー節約の原則

添削では「削」を重視します。わたしが近ごろ思うことがあります。エネルギー節約の原則です。ムダなことばは読みたくないということです。ムダなことは書かないほうがいい。これが原則です。「それは言わなくてもいいよ」ということがあるのです。書く人にとつてもよむ人にとつてもエネルギーの節約です。それがよく自覚できるのが、やはり声を出してよむことです。声を出すと疲れますから、ムダなコトバは読みたくないのです。

たとえば長編小説をよむとします。「この辺はいいや、飛ばしてしまおう」というところが必ずあります。他の本をよむ場合でもそうです。ところが、声でよむときには飛ばすことができません。でも、読んだり聴いたりしなければなりません。疲れます。ですから、不要なことは書かないほうがいいのです。

のです。わかっていることだけ話したほうがよいのです。

ところが、書き手はついつい考えたことのすべてを書きたくなってしまうのです。自分にとつて必要なことと相手にとつて必要なことを区別する必要があるのです。

というわけで、添削の原則は、「簡潔」「明瞭」の二語です。もたもたしている文は思い切って削る方がよいのです。大久保忠利はレロレロ文と呼びました。細かいニュアンスも削りとるのです。

その場合、文学なのか理論なのかということが前提になります。文学としては、その一つの形容詞がもったいないのだという思いがあります。今、わたしは学生のレポート課題を考えています。レポートや理論ならば、それは不要です。「何が何である」という文の明確な論理が重要なのです。

第三に、添削の目的です。添削された文章を書き手が見ることによって、次の文章がよりよく書けるようになるということが大きな目的でしょう。この大学での教育の目標もそこにあると思います。そのためには書き直しが重要です。添削された文章をよむだけでなく、もう一度、自分で自分の文章を書きなおすことです。その結果として、他人から添削されていた人が、次には自分で添削できるようになるのです。「自己添削力」です。自己添削力が文章の推

わたしも、表現よみと称して文学作品の朗読の公演をしています。たいてい作品を少し削っています。短い作品であつても、そこにはムダなことばがあります。声で聴く場合には耐えられません。そのような部分は削ります。目で読んで書かれた部分と、声で読んで聞く場合とは、違うのです。どんな名文といわれるものでもムダはあります。必ずしも声で読まれることを想定していないからです。

ただし、中には珠玉の短編というものもあります。太宰治の「満願」という作品は一行もムダは無いと言えます。文庫本で二頁ぐらいです。また、今の、手元にある稲垣直樹訳『星の王子さま』もムダのない作品の一例でしょう。そういう文章は一語一句を見落とさずに声に出して読みたくなります。しかし、近ごろは、そういう作品は少ないのです。というのも、目で読まれることを想定しているからです。

というわけで、エネルギー節約の原則ということです。さつきお見せしたわたしの添削と皆さんがたの添削とのちがいは、エネルギーの節約の度合いです。わたしの場合、削ることが多くなります。アイマイな言い方ならば、言わないのと同じです。言わないほうがいいのです。わたしも話しの最中にうる覚えのことをつい話すことがあります。それはみなさんを混乱させるだけです。やらないほうがいい

敵力なのです。だれでも文章を書きながら推敲したり添削したりしています。この能力が高まればよい文章が書けるようになるのです。

推敲と添削とはちがいます。推敲は自分のため、添削は他人のためです。添削は他人の立場から文章の内容を検討するものです。それがのちには、自分の文章を客観的に磨きあげる力となるのです。

【連載】第11回

●文章添削の着目レベル

文章は一ぺんに添削するわけではありません。着目のレベルがあります。どのようなレベルから添削をするのでしょうか。これは目的というよりは文章を添削する時の目的意識の問題です。つまり、どの部分を添削するのかという着目の仕方です。先ほどの話では、みなさんは、最初に文章をさらりと全体を読んでいた。つまり、文字を見る、文を見る、文と文のつながりを見る、段落全体を眺めるという手順は、具体的な方法としては正しいと思います。しかし、原則としては書き出しから順序よくよむということが大切です。あくまでも声として文章が読まれるのだと考えましょう。声として文章が順序よく書かれているかどうかを問題にするのです。そして、読み取った内容から部分

ごとに何が求められるかと考えながら手を入れるのです。その上で、手順として添削のレベルを考えるのです。一回よむごとにシツカリと順序よくよむのです。

まず、文字を直す添削があります。文を直す添削があります。文と文のつながりを直す添削があります。文と文の入れ替えをする添削があります。段落全体の構成を見る添削もあります。こう考えると、ほとんど自分が文章を書くくらの労力があるものだとわがかります。ですから、みなさんも、添削をするのと、文章を書くのと時間的には変わらなかったのです。

自分が文章を書くくらの気迫で行かないと添削はできません。恐ろしいことです。でも、楽しいことです。恐ろしさと楽しさが同居しています。すごいでしょう。ですからわたしは退屈をせずに、割が合わなくても添削講座を続けているのです。

その結果、今では、人の文章を読みながら赤ペンを持つてすぐに直したくなってしまうのです。実際に赤ペンで直しながら文章をよむこともしばしばあります。それは文章批評であるとともに、内容への批評へと発展します。

そもそも、文章を理解するということは、実は添削の作業のようなものです。ある人が言っています。

——文章をよむということは翻訳なのである。他人の言

みたくなります。朗読の場がそんな感情の色づけを要求します。また、人にいろいろと話をする場合でも同じことです。声には感情が乗ります。人が書いた文章を読み上げる場合でも同じことです。「これはやさしい話ですよ」という感情と、「あなたたちにはむずかしいですよ」という感情では、声の響きがちがいます。声には感情が乗りやすいのですが、文章にも感情は乗るのです。

たとえば、〇くんのレポートです。一生懸命書いています。感情も伝わります。「大学に合格したら、こんな課題が来てしまった。しょうがないなあ」と思いながら書いてます。それが文章から感じられるのです。ほかに、「めんどくさいなあ、ちょこちょこっと書いてしまおうか」という思いの出たレポートもあります。

そこまで文章から読み取れるのです。それが書き手のモチーフです。どういうモチーフで書いているかを読み取れば、内容がより深く理解できます。

●文章と書き手の意図

二つ目は、文章のかたちと書き手の意図とのちがいをよむことです。書き手の意図と文章に表現された結果とは別です。たぶん書き手はこういう意図で書いたのだらうという想像と、文章に実際に書かれていることは別です。

い回しを、自分のことばに置き換えるようなものなのである。

自分の持っている言語体系と照らし合わせて他人の言語体系をとらえているのです。外国語との関係で言うならば翻訳になるわけです。ですから、添削は勉強になるのです。おもしろいのです。でも、つらいのです。むずかしいのです。相手の文章が、すべて自分に分かるとは限りません。自分の言語体系からはみ出す部分が必ず相手の文章にあるのです。それを読んで理解するのです。自分とズレがあるなという感覚がなければ添削はできません。またそれが添削の面白さなのです。「この人の発想はおもしろいな」という点を見てあげるので。それもよむというこの意味です。

●モチーフをよみとる

第四に、文章のモチーフの問題です。添削の原理に関わることです。まず、書き手のモチーフを生かさなければなりません。書き手がどこに関心を持って、どういう気持ちで書いているか、それを読み取ります。文章の情報と書き手の感情との二重性を読み取る必要があります。

文章の情報の上に感情的なものが乗っているのです。朗読でも同じことです。たとえば、「ある晴れた日にわたしはきれいな空を見た。」という文などは気取った感じでよ

親切な添削者は、この人はたぶんこういうことが書きたかったのだらうと想像して書き足すでしょう。しかし、それはやらないほうがよいのです。むしろ言えていることを明確にしてあげるのです。書き手の意図がどうであらうと、書かれただけのことをとらえるのです。これが理論文の添削では重要です。おせっかいな添削はしないことです。本人が書いてないことまで付け足すのはよくないわけです。むしろ、余分な修飾語などは削って、あなたが書けたのはこれだけですと示すのです。あなたの文章をわかってあげるわねというお母さん意識を出さないことです。見えてないことは思い切ってカットしてしまいます。添削では、親切心は仇になるのです。

文章をよむときにはクールに読みましょう。クールに読んで読み取れることが書かれたことなのです。それが文章の価値です。たぶんこう言いたいのでしようという優しいことは必要ではありません。それはでもおせっかいなのです。

●書き手の意図を読まない

四つ目は、書かれた文章が内容の表現なのだとということです。これは当たり前のことです。しかし、学校教育の悪いところは、作者の意図を読ませようとしています。「この作者は何が言いたいのか」とか、「作者の意図を書け」とか

いうのです。そこで、生徒は何が言いたいのか、読みとろうとしたり、「たぶん筆者はこう言いたかったのだろう」と書くわけです。よく入試問題について、作家のコメントが出る場合があります。すると、「わたしの文章から入試問題が作られたけれども、まるでわたしの意図とは違ったものが正解になっている。わたしはそんなことは考えていなかった」というのです。

【連載】第12回

●文章そのものをよむこと

最近読んだ本に、文章そのものを読めとすすめる本がありました。石原千秋著『国語教科書の思想』（筑摩新書）です。今の学生が読んできた教科書について詳しく書いてあります。著者は、教科書が編集された意図がどうであるとか考えるのではなく、実際の教科書を読んでいったときに浮かび上がる思想を捉えています。いわゆる、構造主義の考えに立った読み方です。我々の考えというものが社会全体のある枠の中で形成されているという考え方です。作者の意図とか教科書は何の意図で編集されたのかということとは問題にしていません。何が書かれてあるかをまっとうに読みましようという本です。

ところが、書かれた文章を正確に読むという教育が日本

では行われていないのです。文章そのものを読み解くのではなく、意図を探らせるのです。先生が生徒を叱る場合にもよく使われます。「先生が何を言いたいのかわかるか。よく考えてみなさい」というような叱り方です。これが困るのです。いやですね。腹を探らせることを生徒に求めているのです。はつきり言え方がいいのです。「先生はこう思っているのだよ」とか、「先生は君がおしゃべりをするのはいやなのだよ」とか、「先生は君たちにこうしてほしいのだよ」と言え方がいいのです。

「何をしたいか考えてごらん」という禅問答のようなことは困ります。これが日本の文化にありがちな「腹を探る」という心理につながるのです。「何が言いたいのかなあ」とか、「もしかしたらこういう人じゃないのかなあ」などと考えます。これは精神的によくないです。これも一種のイジメになります。挙げ句の果てには、ノイローゼになってしまうかもしれません。

つまり、添削では書き手の意図を探るのではなく、書かれた文章そのものをきちんとよむのが原則なのです。読み方の技術については、あとでお話をします。

●文章の形式と内容

第五に、文章の何を直すのかという問題です。結論を言うなら、文章の形式を直すことで内容をとらえるのです。

文章の形式が変われば文章の内容も変わります。これが基本的な考え方です。添削というと、まず文字のチェックのように思われています。漢字、仮名遣い、送りがないかなどですね。しかし、こんなものは学生自身に直させればいいのです。辞書を引きなさいと指摘すればよいのです。添削者は傍線を引いて三角でもつけばよいでしょう。

たとえば、△印を「辞書ひきマーク」などとすればよいのです。添削者が全部引き受ける必要はありません。添削者の役割は、推敲するべきポイントを学生にフィードバックすることでしょう。直してあげますよという親切心ではなく、問題点のチェックをすることによって学生に考えさせるのです。全部きれいに直してしまつたらば、「きれいに直つてうれしいな」で終わつてしまいます。

わたしは日本コトバの会の文章教室にも参加しています。そこで共同助言というものをしています。その場合でも、文がねじれていますと書き手に言うだけです。あとは本人が推敲して直せばいいのです。

聞くところによると、一般の文章教室では先生がすつきりていねいに直してあげるそうです。直してもらった人は、先生に直してもらつてうれしいわと思うのでしょうか。これで月謝千五百円は安いわと思うのでしょうか。しかし、本人のためにはなりません。いつまでたつても自立できません。

ん。推敲のきっかけをあたえて本人が考えるのです。それによつて文章を書く力が高まるのです。何かの形で学生に考えさせるような添削が必要でしょう。世間一般の添削はなくてよいと思います。

【連載】第13回

●文の主部と述部

二つ目は、初歩の初歩ですが、主部と述部とのネジレの問題です。これはバカにできません。文の組み立ての基本は「ナニガ、ドウダ」「何が、どうする」の組み合わせです。ところが、学校教育では、こんな基本的な文法でさえ十分に教育されていません。文法では主語と述語の対応を学ぶでしょう。ところが、実際に文を書くところになるとねじれてしまうことがよくあるのです。子どもばかりではありません。大人でも同じことです。

ここに、日本コトバの会編『コトバ勉強のあゆみ半世紀』があります。この中に、わたしは「接続語の十一通り」という論文を書いています。わたしの文章トレーニングはこの応用です。つまり、接続語を使って、単純な文を論理的に組み立てて書くトレーニングです。この十一通りで文章の分析もできますし、書くこともできます。これをマスターすればよいのです。これを組み合わせると、たとえば起承

転結という組み立てもできます。いろいろなパターンがほかにもできます。文章を手がかりに論理的な訓練をするのです。接続語を軸にした起承転結の組み立てです。それが文書トレーニングです。前提として、文の組み立てが基本になります。

ほかに、わたしが編集した本で、『コトバ学習事典』（1800「光社」というものがあります。今になって読んでみると、自分で自分をほめてやりたい気がします。ちなみに、今、わたしが言ったコトバはオリソピックのマラソンで銀メダルを取った有森裕子さんのことばです。しかし、マスコミが報道するとき、「自分で自分をほめてあげたい」と書いてしまったのだそうです。それ以来、「あげたい」が使われています。これは尊敬語と謙譲語の使い方として、添削でも問題になります。これも添削の一つの課題です。添削は文字の校正ではありません。この本は残部僅少です。この「あとがき」がおもしろいのです。わたしが書きました。「このもう手にした方に」と書いてあります。よんでみましょう。

「あなたは今、この本を手にして、買おうか買うまいかと迷っていますね。それでしたら、絶対に買うべきです。この本に目をつけるような方なら、ましてあとがきから内容を探ろうとするような方なら、この事典

の必要性を感じているにちがいないでしょう。この本はあなたのために作り上げた本と言ってよいでしょう。」こんな具合です。これで買ったという人がいるのです。おもしろいでしょう。自分でも笑っていました。

さて話は戻ります。今お話しした文の組み立てについても、あとでお話をします。

主部と述部の組み立てというのは、文章においてはイロハのイのようなものです。しかし、それが実際に文章を書くといふ忘れてしまうのです。考えがすっきりしないまま文を組み立てるからです。これについても、いちいち直すのではなくて、記号化して書き手に直させるとよいでしょう。

添削の例の中にもたくさんありました。六行もあるような文が書かれています。長いです。長すぎます。これだけ長くしたら、たいいてい文はねじれます。「私にとっての作文」と書いた方です。読んでみましょう。

「まず日頃ぼんやりと、考えている私は、作文を始めようとするので、何らかの課題を与えられることになり、そこでしばしば自分の問題意識の低さを自覚するのである。」

みなさんはテキストを見ながら聞いているからわかります。しかし、テキストがないと、耳で聞いてどこまで理解できるかわむずかしいのです。英語などの外国語では先に述

語ができます。それから後づけとして説明が出てきます。ところが、日本語ではこんなふうです。

「私はきのうから買いたい本が一冊あるのですが、今日こうしてお宅に伺っているいろいろお話をしているうちに、前から話したかったもあるので、あなたに聞いていただいてぜひとも、お話ししたいこともあるのですが、いま思いきっていますと、お金を貸してください。」

これが日本的な話し方です。聞いている人はどんなことを考えているでしょうか。話しが進むにつれて、腹をさぐることになります。

「この人、なんで来たのかなあ……」とと思っていると、最後になって「お金を貸してください」と言うわけです。

長い文はこんな話し方に近くなります。文章の理想としたら、もっと早く意味が分かる方がいい。「こうなのだ、なぜならこうだ」というような簡潔な展開がよいのです。そうすれば、聞き手も最初から結論が分かります。

【連載】第14回

●対話による文章の展開

文章には、原則となる文の展開があります。まず「結論（命題）」を述べて、それから「説明」です。先の例で言うならば、「お金を貸してください」とまず言うのです。

すると、相手の疑問がわきます。「どうして?」「なぜ?」ということです。そこで疑問に答えるのです。

タイミングよく文を展開するには、書き手も読み手の疑問を察知する能力が必要です。読み手にどんな疑問が湧くのか、文を書いたとたんに想像できる能力です。そのため訓練方法を紹介します。

じつは、文章は読み手との対話で展開するのです。たとえば、話しの場合には、「お金を貸してください」と言ったら、相手は「えっ?」と思います。「どうして?」「なぜ?」という疑問です。だから、次に「どうしてか」というと、財布を忘れたからです」とか、「なぜなら、落としてしまったからです」とか答えます。

文章でも同じです。読み手の疑問に答えることで展開するのです。ですから、添削をする人も、文を一文よむごとに、疑問を持ちながら読んでいくのです。一文ごとに質問です。

そこで質問の手がかりになる項目があります。暗記しやすいのが、「ダイ・ドドナ・ドドナ」です。これは小学生からおとなまで使える項目だてです。細かく言うと、「だが、いつ、どこで、どんな、なにを、どのように、どうする、なぜ」です。英語でいう、5W1Hに対応します。これなら一日に三回も読み上げていけば、三日くらいで覚

えられます。日本語ですから、英語が苦手な子どもたちでも覚えられるでしょう。

質問の項目でとくに重要なのが「なぜ」です。これが論文の基本です。弁論の展開の原則について、アリストテレスが言っています。ある命題、つまり「なにが、どうだ」とか、「なにが、なにだ」というかたちの文です。その文が述べられたあとには、「たとえば」か「なぜなら」がつけられます。

これはほとんどの文の展開に言えます。とくに意見文の場合にはこのとおりです。何か文を書いたらすぐに、「たとえば」でつなげるか、「なぜなら」でつなげるか考えます。これが文の展開の基本です。文学文では例外がありますが、理論文ならばほとんど当てはまります。

【連載】第15回

●理論文の読み方

理論文には文学文とはちがった読み方のコツがあります。じつは、読むのも書くのも、理論文の方がやさしいのです。先ほど、わたしは文章は頭からしつかりよむことが大切だと言いました。しかし、わたしは理論文は、そういう読み方をしません。拾い読みです。

その読み方の技術ですが、今ここで少し話をしておきま

しょう。

まず、形式段落に番号を振ります。形式段落というのは、一文字下げたところからです。そこに丸数字を①②③……と振ります。これだけで意味があるのです。わかりますか。実際にやってみると分かりますが、文章の構成がたちと見て見えてきます。詳しくはあとでお話ししましょう。

わたしは今、幸田露伴著『努力論』（岩波書店）を読んでいます。理論文の読み方の訓練としておもしろい本です。文語体で読みにくいのですが、論理がじつに明快です。この人はいわば理科系的な文学者です。こんなに論理明快な人は日本の文学者にはめずらしいです。恥ずかしいほど論理が裸のかたちで現れています。論理がこんなに見えてしまった文章はつまらなくなるだろうと思うかもしれません。ところが、おもしろいのです。この本も、わたしの読みの技術を応用して読んでみてください。

さて、理論文の飛ばし読みをどうやるかという一例です。たとえば、「私が考えていることは三つある。」という展開がよくあります。これを文学文を読むときのように順序どおり読んでいったら、一つ目を読むうちに、あとの二つが気になります。そこで、先まわりして、その三つが何なのかとらえておきます。その三つの書き出しのこぼれを拾っておくのです。「第一に、第二に、第三に……」に傍線を引

いてしまいます。わたしは、このような作業を学生にやらせながら文章の読みかたを指導しています。

なぜこれ考えたかお話しをすれば、国語の読み方教育に役に立つと思います。じつは、わたしは大学生時代から十年ほど、中学生の補習塾の国語の講師をしていました。いわゆる「落ちこぼれ」の生徒が通う塾です。授業で本を読ませようとしても、生徒たちは本を目で追うことすらしませんでした。

何か良い方法がないかと考えて工夫したのが「印しつけよみ」という方法です。生徒に鉛筆を持たせて、印をつけさせながら文章を読ませたのです。この具体的な技術については、あとでもっと詳しくお話ししましょう。

●文学文の読み方

ところで、文学文は拾いよみ、あるいは飛ばし読みではいけません。一語一語、一文一文を大切にしてみます。一つの形容詞が大事なのです。その形容詞を強くよむか弱くよむかで大事なのです。語順が入れ替わっただけで、意味が変わります。すぐれた文学者は、語順にもたいへんな工夫をしています。たとえば、国木田独歩です。この人の文章を読んでいて変な語順だなあとと思うところがありました。「武蔵野」だったと思います。そのわけは声に出してみてもわかりました。音のリズムをととのえるために語順

を入れ替えているのです。独歩は詩人です。文の意味よりもこぼれのリズムを優先することがあるのです。そういう意味では、文学文はしつかりよむ必要があります。

文学作品は、小さい声で良いですから、ぶつぶつと言いながら声に出してよみます。声に出すことが目的なのではありません。よみながら内容をつかむのです。小さい声でぶつぶつ言いながら、内容が掴める速さで読むのです。意味が飲み込める速さです。途中で意味を見失ったら、間を取って考えるのです。

よみながら文を理解する練習としては、新聞のコラム、これを毎日読んでみてください。一日三分くらいです。これを毎日、続けると話をする力もつきます。というのは、話しをしていて、自分がいま立てた主語、その主語の音を記憶しつつ、述語と結びつけることができるようになるからです。

いわゆる「朗読」では、文字をただ声で読んでしまうことが多いのです。主語をよんだ声が述部をよむ声と結びつくことなどは考えません。それに対して、自分の声を聞きながら、主語の声を述部の声につなげて、文にまとめる意識が大切です。これで文を書くときの意識が変わります。ものを考えるときの考え方が変わります。文書いても主語と述語が対応するようになります。ネジレない文が書け

るようになります。さらに、文章のながれも意識できるようになるのです。

【連載】第16回

●接続語への注目

説明文や論文は順序どおり緻密に読まなくてもかまいません。飛ばし読みの手がかりになるのが接続語です。接続詞にかぎらず、論理的なつながりを示す接続語についてはすべてを拾います。文中に出てきたらば、四角で囲むのです。

接続語については、学生諸君のレポートの中で、すごいがありました。とにかく接続語は並んでいます。しかし、並んでいるだけで論理的な意味が成り立っていません。ただなんとなく並べているのです。訓練をすれば的確に使えるようになります。

たとえば、「しかし」という接続語をとってみましょう。一般に逆接だと言われます。「前と後が逆の意味なのだ」というふうに考えられています。そう単純ではありません。たとえば、「私は雨に降られました。」と書きます。「しかし」で、どんな文がつながるでしょう。「しかし、濡れませんでした。」はどうでしょう。「私は雨に降られました。しかし、濡れませんでした。」おかしくありませんね。

でも、前と後は逆ではありません。

これは聞き手の心理に関係あります。「私は雨に降られました。」と話します。すると、聞いている人は「では、濡れたのでしょうかね。」と思います。その後に、「しかし、たまたま傘を持っていたので大丈夫でした。」それが、「しかし」です。つまり、前文から想像することに反する場合、想像に反することが次の文で書かれるとき、「しかし」を使うのです。

学生のレポートは接続語を使っているのですが形式だけのです。内容を表現していないのです。つまり、内容との関連で理解してないのです。ですから、こういう基礎的な接続の使い方が重要です。

接続語の問題は国語の試験の定番です。「次の四角の中へあとの部分から選んで適当な接続語を入れなさい。」というのです。目ごろから文章を読むときに、考えて読めばいいのです。これでわたしは補習塾の生徒を説得したので、す。「いいか。試験には接続語の問題が必ず出るのだから、文章をよむときにも必ず四角で囲んでおけばいいのだ。」

これはたしかに出来ました。必ず出るのですから最初から予想して四角をつけておけば点は取れます。そして、接続の関係を読みとることで論理的な読み方の訓練もできるのです。たとえ試験にでなくてもいいのです。結果として生

徒の頭がよくなるのですから。試験のあとで「出ただろう」というと、生徒は「出ました」と言って喜んでいました。

点数も取れて頭がよくなるのですから一石二鳥です。

●「しかし・それに対して・ただし」

まず接続語を意識することが文章の論理訓練のはじまりです。文章トレーニングでは、一つ一つの接続語の使い方を一からやり直すことができます。一般に「しかし」はさまざまな意味で使われています。別の接続語にする方がよい場合もあります。わたしは、対立する事柄が並ぶ場合には、「それに対して」を使います。また、追加的な説明では「ただし」になります。たとえば、「君に百万円をあげる。しかし、明日だ。」はおかしいのです。これは、「しかし」ではありません。「ただし」です。

「それに対して」はこんな例になります。「君のお兄さんは勉強できるね。君はできないね。」は、「しかし」ではつながりません。ここの厳密性が重要です。これは、「君のお兄さんは勉強ができるね。それに対して、君はできないね。」という比較なのです。これが「しかし」と

「ただし」と「それに対して」のちがいです。これが正確に区別されないと文章の論理もめちゃくちゃになります。

ですから、このレポートの学生のようにただ接続語を並べても論理ができていないのです。じつは、わたし自身、

論理の訓練は大学に入って論理学を学んで初めて知りました。論理の基本はもつと早く、できれば小学校から教育するべきです。論理教育などというとむずかしいと思うかもしれませんが。しかし、教育の方法を工夫すればできないことはないのです。問題は教育者の論理教育への関心があるかないかです。関心があればいくらでもできるのです。

【連載】第17回

●抽象化と具体化の論理

もうひとつ重要な論理の考え方に、上位概念と下位概念があります。文章の展開では、抽象化と具体化の問題になります。これも対立する接続語の使い方です。

最近ではパソコンを使う人が多いので、パソコンのデータフォルダを例にしましょう。いろいろなファイルを作るとき、それぞれのファイルを、どのフォルダーにおさめるかという考え方です。分類の仕方です。これもいい論理訓練になります。

学生たちにはこんなふうに話します。

「君もパソコンを持っているだろう。そのファイルはどのように分類するのか。フォルダを作って分類をするでしょう。それと同じで、話しをするときにも、今、自分はフォルダーの話をしているのか、中のファイルの話をしている

のか、考えるです。それが抽象と具体との関係なんです。」という具合です。

また、こんな例もあります。甘いものの好きな人が、「私ね、甘いものが大好きなのです。毎日のように食べていますわ」と言います。ここに「たとえば」をつないだときに話しが分かりやすくなります。「たとえばね、羊羹なんかまるまる一本食べてしまうのですよ」「チョコレートなんか一本まるまる食べしまうのですよ」というのです。これが具体例です。「甘いもの」という抽象が「羊羹」や「チョコレート」で具体化されるのです。

話しの構成でも抽象化と具体化が関係あります。わたしもこの講義のためにレジュメを作りました。話すべき事柄を箇条書きの文でどんどん書きました。そのうちに、中心となる柱が見えてきます。最初に考えた柱ではなく、見えてきた柱で事柄を分類しました。柱に入った事柄はさらに細かく分けて分類して行きました。柱に入らない事柄は切り捨てるか、あるいは、新たな柱を立てて、事柄を追加してより詳しくします。

パソコンで言うなら、事柄がファイル、柱はフォルダです。文章で言うならば、フォルダは章や段落です。書くときにはもちろん、読み取るときにも、フォルダとファイルの意識が重要です。段落というフォルダの中にファイルに

あたる命題である文が書き込まれているわけです。抽象と具体の意識です。文のまとまりとして段落が展開するので。原則は、結論を先に述べて、それから「たとえば」ないしは「なぜなら」を述べることです。

添削をする場合にも、このような文章の論理的な組み立てを見ます。また、展開のながれというものもあります。段落の配置と展開とを見ながら、段落に入れるべき事柄や文を判断します。不要なものは削り、必要なものを加えます。文章のながれからみて、別の段落に入れるべきことは前後に移動させます。「添」も「削」も、部分だけ見たら判断できないのです。

というわけで、添削というものはなかなかむずかしいということになるのです。以上が文章の何を直すかというお話です。

●接続語の対立関係

接続語には対立関係があります。対立する接続語が対になっていきます。今お話した「たとえば」の反対は何ですか。「たとえば」は具体化の接続語です。それに対して抽象化の接続語は何でしょうか。「たとえば、羊羹なんかまるまる一本食べてしまいます」といいましたが、その逆の順序で、「チョコレートなんかバラバラにチョコを一日で食べてしまいました」と先に言う言い方があります。そ

う。前おきでお話したことに追加して、実践的に詳しくお話しします。

●印しつけよみ

おしゃべりの人で話がまとまらない人がよくいますね。喫茶店なんかで話していると、次つぎといろいろなことを並べていくだけで、話しがまとまりません。「羊羹が好き、饅頭が好き、チョコレートが好き、飴が好き」と、同じ種類の話しを何度も繰り返します。ですから、「つまり、甘いものが好きなのです」といつてやればいいのです。相手も「そうです、そうです」ということになります。

文章でもこれと同じことが言えます。抽象的に書いていくところ、具体的に書くべきところがあります。とくに重要なのは、具体化してしなければいけないところです。言語表現というものはうっかりすると抽象化する傾向があります。具体化ができてないと、荒っぽい文章になります。自分で文章を書くときにも、人の文章を添削するときにも、文章のながれの中で考えます。「ここは抽象的でないな、ここは具体的にすべきだな」と判断するのです。

文章でもこれと同じことが言えます。抽象的に書いていくところ、具体的に書くべきところがあります。とくに重要なのは、具体化してしなければいけないところです。言語表現というものはうっかりすると抽象化する傾向があります。具体化ができてないと、荒っぽい文章になります。自分で文章を書くときにも、人の文章を添削するときにも、文章のながれの中で考えます。「ここは抽象的でないな、ここは具体的にすべきだな」と判断するのです。

「本は汚して読め。汚さなければ自分の本にはならない」印しつけは文章の分析作業です。文章から何をよみとるかという実践です。しかも、読書の記録にもなります。まっさらでしたら、何を読みとったのかわかりません。また、おもしろいことに、印しのつけ方でその人の本の読み方が分かります。文章の何を読み取っているか、どのように文章を理解しているかが足跡として残っているのです。

じつは、赤ペンで添削をすることも文章を読んだ証拠です。わたしはいいねいに読む本には必ず印しつけをします。内容の読みとりの場合にはエンピツで、批評的に読むときには赤ペンで印しつけをします。たとえば、今回の学

う。前おきでお話したことに追加して、実践的に詳しくお話しします。

【連載】第18回

●添削の方法と手段

それでは、「3 添削の方法と手段」の項目に入りましよ

生に要約の課題として出された文章には赤ペンを入れました。どうぞ、ご覧ください(見せる)。このように徹底的に印しつけをしました。

印しつけとは、ていねいに本をよむための一つの手法です。文章をただ目で見ていただけでは内容に集中できません。ですから、文章に操作を加えることによって文の構造を取り出すのです。文の構造を見ることによって文の内容が分かるのです。また、印しをつけた単語をもとに、自分の文を組み立てるのです。

めんどうだという人がいます。それはまんべんなくつけようとするからです。すべての本を印しつけで読まなくてもいいのです。むずかしそうに読みにくそうな本や、読んでいって読みとりにくい部分になったらつければいいのです。

原則となる印しはたくさんはありません。まず、マルとセンです。文の骨組の理解です。主部にマルをつけて、述部にセンを引きます。わたしはこれを学生時代にカントやヘーゲルの哲学をよむときやりました。やさしい文章ならつけなくてもわかります。しかし、むずかしい文章には必要です。今は、幸田露伴の『努力論』(岩波文庫)で実行しています。これは内容も形式もおもしろい文章です。主部と述部との印しは初歩の初歩です。

やって訓練すればよいかは書かれていません。

添削者がするべきことは、重複文、複文、重文を単文に区切ることです。そして、主部と述部とのつながりを読みとります。複雑な文も、基本は主部と述部の組み合わせからできています。単文にすると長くてネジレた文のアイマイがはつきりしてきます。添削者はこの原理を身にしみるほどしっかりと覚えておくことが大切です。

印しつけの原則は、マルでもセンでも、五行六行と長く伸ばして引かないことです。こんな場合です。(板書する)。そして、印しをつけるにはできるだけ柔らかなエンピツを使います。

これは出版社にとってもいいことです。「本は綺麗に読ましよう」というと、いつまでたっても本が消耗されません。しかし、わたしの本は古本屋に売れません。「お宅のは、線が引いてありますからね。」と言われてしまいました。「わたしのは消しゴムで消えます。」といっても、「お宅のはね……」と言われます。まちがいなく本が消耗されます。

そのかわり、わたしは本を人にあげます。すると、印しを喜んでくれる人もいます。以前に、日本文学の研究者のまとまった本、『片岡良一著作集』を文学の研究者に無料で譲ったことがあります。そのときには、「印しがたく

わたしはマルやセンは七文字よりも長くしないという原則を立てています。学校の授業で「そこが大事だから線を引きなさい」と、何行も線を引かせることがあります。それでは、どこが大事なのか絞り切ることができません。ゲーテはすごいこと言っています。「すべてが見える目は何も見えないのと同じことだ」というのです。おもしろいでしょう。すべて線を引いたら、線を引かないのと同じことです。わたしはもつと短く単語に限定してセンを引きます。さらに、よいところには◎や○、わるいところには三角印、疑問の場合には？、などの記号をつけます。(参考画面)

これも、この学校の添削指導の共通ルールとして使えます。三角がついていたら、そこは書き直しをしなさいという印しというのはどうでしょう。添削ではそれ以上に手を入れることはありません。書き手が考え直せばいいことです。また、文が長すぎる時にもセンを引いて「長い」と書けばよいでしょう。その場合も書き直しは書き手です。

長くなってネジレた文の書き直しの原則があります。長い文はたいいてい、重複文、複文、重文です。それを単文に書き直します。そして、接続語でつないで論理を明確にすることです。どの文章の本を見ても、書かれている原則です。書いてあるけれども、どうやるかは書いてありません。ほかに、起承転結が大事だと書いてある。しかし、どう

さんついているので、いろいろと参考になります」といわれました。まあ、これは例外です。

接続語と指示語は四角で囲みます。そして、並んだ項目には、センを引いて丸数字をつけていくということは、前にお話ししました。

【連載】第19回

●自分の索引を作る

本を構造的によむためには、索引を作るという方法もあります。本の全体をつかむためのいい方法です。専門の本などには索引が付けられています。しかし、もたら本についている索引は意外に役に立ちません。パソコンの技術を使って機械的に拾い上げるのです。また、書き手の関心から作られたもので、読み手としての不満が出ます。わたしはいらぬ索引を消したり、書き加えたりすることもあります。

自分のための索引はかんたんに作れます。わたしは索引を学生に作らせます。たいいていの本には後ろのほうに空白のページがあります。それを利用します。と指導しています。最初の授業のときにこんなふうに話します。

この本には索引が付いていないから、自分用の索引を作しましょう。いちばん後ろの空いたページをタテに四つに

折りなさい。一ワクごとの上に、ア、カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ、ワと記入しなさい。そして、これから本を読んで行つて、引きたいことばを見つけたときに、そこに書きこんでページを入れるのです。」

それからしばらくは、授業のときに「このページの、この用語は索引に入れておきなさい」という具合に指示します。それからあとは学生の自主性にまかせます。

いちいち書きこむのはめんどろだという人がいます。しかし、経験してみれば分かりますが、「あのことはどのあたりに書いてあったかな」と、あとから本をめくって調べた手間を考えたら、読みながら索引に入れる方がよほど能率的です。要は、それを習慣化できるかどうかです。『随想録』の著者であるモンテーニュも「習慣」の重要性を繰り返し繰り返し語っています。

小説を読むときにも索引をつけると便利です。とくに長編ですね。わたしは、エミール・ゾラ『居酒屋』（新潮文庫）につけました。登場人物が最初に登場するときのページを入れておきます。次に登場したときには、そのページを見ることが出来ます。わたしはほとんど読みませんが、推理小説の犯人捜しにも役にたつかもしれません。

そのほかに、目的を決めて拾えば、さまざまナリストができます。わたしは調理師学校で教えていたので、作中に

流行っていますが、あれは岸本さんという人が開発したものです。景山さんは、岸本さんから学んだのです。

ラクダ式では、自分で採点をします。自己採点です。自分でストップウォッチで時間を計って、自分で記録表に結果を記入するのです。ところが、百マス計算は先生が時間を計っています。それでは依頼心が育ってしまいます。

子どもの自主性を育てるためには、なんでも押しつけない方がいいのです。たとえば、わたしは学生に本をすすめるとき、こんな言い方をします。

——大きな声では言えないけれど、むかしは発売禁止だった小説が今では読めるのだよ。とんでもないシーンがあるのだけれども無削除で出版されているんだ。ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』という小説だよ。

わたしは、小沢書店から発売された『チャタレイ夫人の恋人』という小説を学生時代に買いました。ところが、今では、翻訳者の伊藤整の息子である人が、新潮文庫で無削除版を刊行しています。これまで、性描写の場面はカットされていました。そこがすばらしい描写なのです。花が小道具として使われる場面が印象的です。関心ある方は、今は手に入りますからぜひお読みください。

不思議なことに、堂々と出てしまうとこういう本も読まれないのです。学生のころ、わたしは上下二巻の初版の本

出てくる料理の名前を拾ってみることをすすめました。世間には、文学作品などから索引で拾い出したような内容をまとめたような本があります。そんな作業ならば本を読みながらかんたんにできてしまうのです。

このようにして索引を作った本は完全に自分のものになります。あとで、読み返したり、テーマについて考えたりするときに、じつに役にたちます。こういうふうになった本はもう捨てられなくなります。これも情報の収集の考えの一つの応用です。

【連載】第20回

●本のすすめ方

わたしはセルフラーニングを重視しています。先生がいなくても勉強ができる方法の工夫です。公文式から出た人が考えたラクダ式という教育方法があります。ラクダ式の算数数学といえます。わたしの研究所のスタートは、このラクダ式の教育として、算数・数学の通信教育をやっていました。

今でも、わたしの基本的な考えはセルフラーニングです。公文式の場合には、採点するのは別の人です。ところが、ラクダ式では、ストップウォッチを使って自分で時間を計って自分で採点をするのです。今、百マス計算というものが

を神田を歩いて探しました。当時、一冊1500円くらいしました。今の人は露骨でエロチックな作品はよむのかもしれない。しかし、文学的な想像力を刺激しません。ほかに永井荷風の作品や、『チャタレイ夫人の恋人』のようなものは、性の描写も美しく想像させるように書かれています。

●山カッコでくくる

話を戻しましょう。まず、マルとセンです。接続語は必ず四角で囲みます。ないしは指示語です。これらは四角で囲みます。これが印しつけよみです。問題は、山カッコです。どこにつけるかというと、長い名詞句です。わたしは小説も書いていますが、最近、ある教訓を得ました。わたしの知り合いが中国の人です。開封大学というところの日本語の先生です。わたしの書いた「クロの話」（聴いて読めます）という作品を、中国語に翻訳してくれました。訳したあとで、十五項目の質問がメールで届きました。これで中国の人には何が分かりにくいかわかりました。この山カッコのつくことばが分かりにくいのです。長い名詞句です。たとえば、「何々が何々する何々のこと」という部分です。それについての質問が半分近くありました。これは良い教訓でした。

「次の文を単文に書き直してください」という質問がい

くつもありました。中国の日本語学科のベテランの学部長がそういうのです。ですから、学生諸君が分かりにくいというのも無理はありません。日本人の学生でもきつと同じことでしょう。長い名詞句を、山カッコでくくるのです。くくらせて読ませるのです。添削をするときにも、長い山カッコの部分を書き換えるかどうか一つ一つのポイントになります。

まとめて言いますと、やたらと長い文章でも山カッコでくくることによって、簡単な文の構造が見えてくるのです。例えば、「……が、……と、……に、……を、……した」という構造の中に、山カッコでくくられる名詞句がはめこまれるという具合です。

学生諸君の書いた文章の要約の課題の中にも、山カッコでくくられる部分を取り出されるわけです。例えば、この学生はとてもよく書けていました。くくるべきことばをちゃんとキャッチしていました。モチーフはありませんが、文章に書かれた限りの要点を取り出してまとめています。山カッコでくくられるところを拾い出して、つないでいるという意味では要約ができています。

【連載】第21回

●項目には丸数字をつける

●段落に番号を振る

さて、ここまで一時間半かかってお話してきました。

今わたしが話しているのは、レジュメの「二、添削の方法と手段」というところです。はじめに、添削の第一はよむことだとお話をしました。文章をきちんと正確によむ読み方として、印しつけがあるのです。これについて、最初にみなさんにお渡ししたわたしの印しつけの見本をご覧ください。もう一度、復習をしましょう。(資料01・資料02)

第一は、段落に丸数字で①②③……と番号をふることです。それにどのような意味があるかお話しします。これによって何が分かるのでしょうか。わたしの教育の基本的な考えは、説教をしないでやらせてしまうということです。理屈でわからせるよりも先に体験をさせてしまうという教育方法です。やってみて考えさせる方法です。行為をさせることによって、あとで意識を生じさせる方法です。たとえば、「文章の組み立てをよく見なさい」と言うのは説教です。そうではなくて、「段落に番号を振りなさい」と言うのです。番号を振ればそれによって組み立てが見えてきます。「一段落よりも二段落が短い」とか、「長い段落があるな」とか、「段落が平均しているな」とか。そんなことが感じられればいいのです。それで、文章の全体が段落によって分析されたことになります。それが認識です。

もう一つは、項目立てをしている語句については、線を引いて丸数字をつけていきます。これは、前にも話しましたが、落ちこぼれの塾で国語を教えているときに生徒から教わって取り入れた方法です。「おもしろいことやってるね」と見つけました。

ちなみにこんなことをご存知でしょうか。山にある木の数え方です。山の中に三百本ほどの木があるのですが、それをみなさんはどのように正確に数えますか。いろいろな方法が考えられます。わたしが生徒によく話をするのは次のような方法です。あらかじめ三百本の縄を用意しておくのです。そして、一本ずつその縄で縛って行くのです。縄が不足すれば追加をします。追加の分が正確な数です。また、縄があまれば、それで正確な本数が分かれます。これも、丸数字をつける意味を示す一例です。

以上のように、印しつけよみと言うのは、みなさんが添削のために文章をよむときの一つの方法です。しかし、これを一般の読書の方法として学生の指導にも利用できます。教科書をいっしょに読みながら、印しつけよみでポイントの理解を共有することができます。「どこそのコトバにはマルをつけてください」「どこそのコトバには線を引いてください」「どこそのコトバに丸数字を振りなさい」と言った具合です。

添削の場合でも、段落に番号をつけておくことで、学生に文章の構成を自覚させることができます。添削者が段落に番号を振って置いて、あとで段落番号を示して「何段落が長い」とか、「この段落とこの段落はつなげた方がよい」とかコメントすればよいのです。長い段落については、「二つに分けなさい」とか指示をします。原稿用紙で二、三枚の文章では、段落をつけずに一つの文章を書いてしまうということもあるのです。

●テーマやキーワードをマルで囲む

第二に、マルで囲んだ語句は主語あるいはテーマないしはキーワードです。わたしの見本の文章では、マルがついているのは、「学生たち、議論、レポート」などですね。じつは、このマルとセンと四角のついたコトバを抜き出すだけで文章の要約ができるのです。わたしはじつさいの授業ではテキストの文章を印しつけよみしてから、印しのついたコトバを板書します。そうして単語をつないで読みあげて要約をして見せます。新聞記事でも何でも材料になります。

●山カギで名詞句をくくる

ところが一般的に要約というと、読み手の好みでポイントを抜き出すというような考えが多いのです。わたしが、文章の表現に忠実に山カギでくくった語句があります。こ

れによつて文そのものの構造が見えます。(学生たちの間に蔓延する個人的、抽象的思考)です。くくることによつて、「私は……対峙できない」と書いてあることに對して、「何に對峙できないのか」ということが考えられます。それは、(学生たちの間に蔓延する個人的思考的傾向)というものです。さらに言う、「(個人思考的考え)」というものが、学生たちの間に蔓延している」という二重構造になっています。くくっておけばそれが一つのキーワードとして見えてきます。それは文章全体のテーマに関わる事になります。この文章の六段落からあとは重要でありませんから、わたしは印しをつけずにざつと読んでいます。

【連載】第22回

●カギカッコと丸カッコでくくる

第二に、理論文の場合でも、人の語ったことばにカッコをつけて読みます。会話にはカギカッコが付いているのが普通ですが、付いていなくても、だれかが口にしたことばならばつけます。いわゆる間接話法の部分です。こうすると、書き手のことばから書き手以外の人が語ったことばを区別して確認できます。

また、人が心の中で思ったことばにはカッコをつけます。カギカッコと区別するために丸カッコと呼びましょう。言

語学では「内言(ないげん)」と呼ばれることばの部分です。意識の外に出ずに人の心のうちで表現されることばです。人物の内面にあることばです。いわば心のうちの思いを表現したことばです。

さて、この文章では(資料参照)、1枚目の6段落に内言の例があります。(添削資料01・添削資料02)

「……と思い込んでいる」という語句が目じるしです。その前の(客観的・中立的立場を求めなければいけない)という部分が内言です。書き手が学生たちの思いを表現します。

「杓子定規に」を丸カッコの外に出しました。これは書き手による批評のことばです。つまり、書き手は学生たちに対して、(客観的・中立的立場を求めなければいけない)と思うことは杓子定規ですよ。よくありませんよと批評しているのです。

どんな文章にも、このように書き手が他人の意識をとらえる構造があります。それは書き手がだれかと対話的に関わろうとすることから生じます。書き手のことばと他の人のことばとが、相互にからみあつて書かれています。その関係を明確にするために、このようにカギカッコや丸カッコをつけるのです。

ただし、理論文の場合には、丸カッコをつけるような表現はあまり使われていません。それに対して、文学文の表

現にはたくさん出てきます。たとえば、太宰治の作品ではひとりごとのような内言が延々と続く場合がめずらしくありません。そこに丸カッコをつけて読むと、人物の内面の動きがよく分かります。書き手や人物の気持ちや心理などは、このようなかたちで文章に組み入れられるのです。それは一般の文章にも応用できる大事な表現なのです。

では、以上で、印しつけよみについては終わりにしましょう。

●文章の批評的な読み方

ところで、今回課題に出されたこの新聞記事の文章は、よむのにとて時間がかかりました。正直なところ、いい文章ではありません。考えの論理構成が明確ではないからです。少し解説をしましょう。

赤ペンの印しがいっていると付いています。文章を読むときの印しつけは鉛筆ですが、添削の場合には、いわば印しつけを赤ペンで行うことになります。レジュメで「項目」の印しつけと書いた例が、今回の文章の2枚目の5行目あたりにあります。9段落です。

書き出しは次のように書かれています。(数字は段落番号) 9「戦後日本の教育は、社会や伝統の抑圧に抗して個人の権利と自立性の尊重を強調してきた。」

字づらを見ても理解しにくいので、名詞句を山カギでく

くつて、項目の丸数字を振ってあります。活字に直せば次のようになります。

9「戦後日本の教育は、社会や伝統の抑圧に抗して(個人の①権利と②自立性の尊重を強調してきた)。」

「個人の権利」が①です。そして、「個人の」は「自立性」にもかかりますので、項目番号は「権利」に①、「自立の尊重」に②とつけました。それぞれの項目は、「①個人の権利」、「②個人の自立性の尊重」となります。

この文章の論理的な内容で問題になるのは、9段落、10段落あたりです。山カッコによつて名詞句が目立ちます。このかたちで修飾語を重ねて、論拠なくいつきに論じてしまふのです。

その例は、10段落の下から2行目です。(個人主義思考を無批判に是とする教育)とあります。このことは、これまでのどこに書いてあるのでしょうか。どこにも書いてありません。「個人主義的思考」とは、どんな思考でしょう。学生たちの発言のことでしょうが、それは例ではあつても定義ではありません。9段落の「個人主義」ということばを、10段落で「個人主義的思考」とまとめます。そうして、このような結論にしてしまします。そこに至る論理の展開も説明ありません。

9段落に「しかし、個人主義は両義的である。」と書か

れています。しかし、この「個人主義」についても定義はありません。九段落、十段落は、いわばどきどきまぎれに持論を書いてまとめたようです。書き出しの、いわゆるイントロ部分、1段落から3段落から6段落あたりまでは、まったくムダなエピソードが語られています。言いたいことは、最後の一段落です。ところが、どきどきまぎれに書かれたので論理がありません。新聞にはコラムのような記事として掲載されたのですが、もう少し論理の構成が必要です。添削したくなる文章です。

以上、この文章はわたしの印しつけの見本としてお配りしました。

【連載】第23回

●添削には校正記号を使う

それでは、実践的なお話しに入ります。校正記号についてのお話です。

ここであらためて言いますが、添削には校正記号を使います。しかし、添削について書かれた本で、はっきりと「校正記号を使ってやるのです」と書かれたのを読んだ覚えはありません。また、説明も書かれていないようです。そもそも添削の本がないのですから当然です。

どなたか英語の校正をおやりになった方がいらつしやる

識で読み取れるでしょう。要するに、赤ペンの部分についてどのように直すか読みとればよいわけです。

●添削には赤ペンを使う

また、あらためて言いますが、添削には赤ペンを使います。なぜ赤ペンを使うのでしょうか。また、なぜ赤ペンを使うことに意味があるのでしょうか。

はじめに、赤ペンを使うことの意義をお話しておきます。印刷された文章には、なかなか手を入れにくいものです。活字にはある種の権威が感じられるからです。わたしはレジュメにこんなふうに書いています。

「活字でよむ文章には権威が感じられる。しかし、赤ペンを使って、印刷された書類や本をよむ経験は大切である。書物の権威と戦うことで、文章に自由に手を入れられる」

「書物の権威と戦うこと」、これが重要なことです。あとは、「目〴〵から赤ペンを入れながら文章をよむことによって、批評的な読み方が身につけられる。」という訳です。じつは、赤ペンを使ってよむことは、学生にやつてもらいたい事なのです。

本を読むときにも、添削をしながら読んでかまわないのです。赤ペンがいやならば、鉛筆で書き入れながらよむのです。「おかしいな表現だな」とか、「この文章はおかしい

そうですね、どなたでしょうか。「どういう記号をつけたいのか困った」という方いらつしやいましたね。どなたでしょうか。そうですね。「添削をしてください」と言われても、どういうふうな書き込みをすればいいのか、まったく知らなければ困ります。

校正記号の説明としておすすめする本は、日本エディタースクール編『校正記号の使い方』（1998日本エディターズクール）です。安いのにも関わらず、よくまとまっています。

このテキストをご覧ください。ずいぶん多くの記号があります。しかし、それほどたくさんの記号を覚える必要はありません。添削に使う記号として、わたしは8つの項目に丸をつけています。

わたしの講義レジュメをご覧ください。「2添削の方法と手段（2）校正記号」に必要な項目を8つあげてあります。

①誤字を直す、②文字を入れる（句読点）、③取り去る（取り去ったあとをあげておく）、④字を入れ替える、⑤はなれた字を入れかえる、⑥改行、⑦行を続ける（追いつみ）、⑧行を入れかえる

以上です。どうでしょうか、私がお配りした添削の見本の例をご覧になると、とくに知識がなくても、けっこう常

な」と思ったら、正しい文章に直すのです。これが目〴〵の添削の訓練になります。「この言い回しは変だな」と感じたら、その場で線を引いて△をつけておけばよいのです。わたしは実際にやっています。

本になった文章や作家の文章が完璧かというと、そんなことはありません。どんな作家の作品にも必ず、おかしい言い回しや、直したくなるような表現があります。どんな作家でもあります。本になった文章を完璧だと思う必要はありません。直す余地があります。印刷されたということ

で権威が生じているのです。近ごろは多くの人がパソコンで書くようになりましたから、自分の文章を活字として読めます。本の形にすることもできます。ですから、活字や印刷物への権威はずいぶんなくなりました。しかし、より積極的に添削をしながらよむという訓練も重要なことです。

ちなみに、わたしが使っている書きやすい赤ペンをご紹介します。100円です。パイロットから出ているV・C・O・R・N〈直液式・水性〉というものです。いろいろなボールペンの赤ペンを試しましたが、今ではこれがいちばん気に入っています。

まず覚えて頂きたいのは、①誤字を直すことです。間違った文字から線を引っ張ってその先に正しい文字を書きます。

簡単です。

②間に文字を入れる場合には、引つ張った線の先を二つに枝分れさせます。ここに書いている記号です。書き加える部分がたくさんになった場合には、線の端を丸く漫画の吹き出しのように囲みます。作家の大江健三郎などは、マルで囲んだ書き込みがたくさんある原稿を書いています。

④いくつかの語句を入れ替える場合には、長いS字の形で入れ替えを指示します。あとは、③取り去るでは、文字の上に線を引けばよいのです。わかりにくければ線を二本ひきます。さらに、「トル」と付け加えてもよいでしょう。もしも、直してしまつたところが間違つていて、元に戻したい時には、カタカナで「イキ」と書き添えておきます。

だいたいこんなもんです。このくらい分かていれば十分です。たくさん記号はありませんから、むしろかしくありません。

【連載】第24回

●添削記号の工夫

添削の記号には決まり切つたものがあるわけではありません。いろいろな工夫の可能性があります。例えば、語句の入れ替えの場合には、線で囲んで入れ替えが分かるように示せばよいのです。第一の目的は、添削をされる人が

「このことごとを入れ替えればよいのだな」と分かることです。

注意すべきことは、添削を見やすくすることです。添削をすればするほど、用紙の全体がグチャグチャして読みにくくなります。赤ペンの線もたどりにくくなります。そうならないように、読みやすい線の使い方をすればよいのです。最短距離で示す方法を選べばよいのです。赤ペンで書きこむのが限界になったら、青ペンを二次的な添削に使うという手もあります。赤の上から青で書けば目立ちます。

宮沢賢治の推敲原稿では、赤や青の書き込みがあります。(参考)Ⅱ渡辺推敲原稿 渡辺推敲01 渡辺推敲02

さらにこんな記号も付け加えておきます。⑥改行の印です。長い段落の場合、あるいは段落の中で話題が変わる部分についてはこの記号で示します。クランクの形で改行の位置を示します。⑦行を続けるという記号もあります。これは長く伸ばした逆のSのかたちで、行末と行頭とをつなげるものです。段落を続けるときにも使います。

そのほかに、わたしが独自に使っている記号もあります。ヤマカツコです。保留の意味です。「これは、なくてもいいかな？」という部分を山カツコでくります。そしてその脇にっをつけておきます。そこを削るかどうか、判断は書き手にまかせます。これも、親切に学生に教えてあげる

ための記号です。「どっちでもいい」という記号です。

これも添削のルールに入れておくといのではないでしょう。うか。そうして、学生には、添削を受ける前にかかじめ添削の約束ごとをまとめた用紙を配布しておく理解が深まるでしょう。

どちらかの表現を選びなさいという記号もあります。まちがいでないけれども、別の表現があるという記号です。該当する語句に傍線を引きます。そして、その脇に代替案を記入します。これにも傍線を引きます。これがミソです。ほかの添削とちがうところです。二つあれば、二つ書きまします。学生は検討して、どちらかの表現を選択することになります。検討することで学生は文章を推敲したことになります。

また、わたしはコメントを記入する場合には、必ず頭に※をつけます。あるいは、コメントはカタカナで表記します。そうしないと、添削のことばなのかコメントのことばなのかわかりにくくなる可能性があるからです。

●添削の相互理解

少なくとも、添削者と添削される者との間に、添削記号の共通理解が必要です。添削を受ける人が、どのように文章が添削されたのか理解できる共通ルールです。添削者の記号が添削される者に理解されることです。ルールが共有

されることによって後のち、学生自身が、自分の力で自分の文章に添削できるようになります。そんなルールについても、これから考えてゆきましょう。

先ほど、「わたしの力でやってゆけるのでしょうか？」とおっしゃった方がいました。わたしは一律に完璧な添削を求めているわけではありません。「ここまでなら共通してやれる」というところで進めていけばよいでしょう。そのためには、原則となる共通ルールが必要なのです。その線をどこに引くかは、皆さんが協力して出していけばよいことです。ですから、心配しないでください。皆さんがやれるところの共通の添削をすればよいのです。

添削を受ける側が記号が読めるようになれば、添削者が完璧に直さなくてもよいわけです。つまり、添削された文章を受け取った学生が、それをヒントにして自分の文章を推敲できればよいのです。添削者が検討すべき部分に記号をつけて、あとは書いた本人に推敲を任せるということではないのです。添削者の考えで完璧な添削をするよりも、むしろそのほうが、学生の文章推敲力が高まるのです。

【連載】第25回

●タブリを削る

いよいよ添削の具体的な内容に入ります。これまでのと

ころは、いわば添削のための予備的な知識の確認でした。
では、講義レジュメをご覧ください。「3 添削の原則と手順」です。順に説明しましょう。

(一) 削る・加える・取り換える

この項は、(1)削ると(2)加えるに別れます。簡単に言うと、添削とは、削るか、加えるか、取り換えるか、この三つの作業です。

(一) 削る

削る部分は、文のダブリ、単語のダブリです。繰り返しや強調をしたりすることがあります。それは表現なのか、クセなのか、問題になります。注意すべきは、文や単語のダブリが、文章表現の効果を上げているのかいないのかということです。一般的には、「近いところで同じことばを繰り返すのはよくない」ということです。しかし、これも場合によります。それぞれの文章の効果として考えなければなりません。一律に当てはめられません。

よくあるのは次のような場合です。ある段落で最初に主語が書かれます。例えば、「私は……」という文があります。それからあとは、主語に対応する述部が続きます。

「どうした。どうした。どうした」という具合です。これにいちいち主語を入れる必要はありません。一度登場した主語は、交替しない限り省略が可能です。いちいち書いた

らうるさくなります。途中で主語が、たとえば「母は……」と変わった場合には、書かねばなりません。入れ替わるまでの主語「私は」は省略されます。これをいちいち入れるならば削ってかまいません。

●漱石「ころ」の「私」

ところが、文学作品の場合は微妙です。夏目漱石の作品「ころ」には、うるさいほど「私は」が登場します。「わたくし」と読ませているのでなおさら耳につきまします。「私は……私は……私は……」という具合にやたらと出てきます。一般的な添削の原則から言えば、その多くを削り取ることが可能です。

ところが、「私は……」を繰り返すことによる文学的な効果があります。個人主義と自己主張のテーマが「私は……」の繰り返しから感じられるのです。これは声に出して読んでみるとよくわかります。文字づらを読んでいる限りでは「私は……」が多いんだと頭では分かるのですが、声に出してみると「私は……」と繰り返すことによって、主体である「語り手」の意識が強調されるのです。上と中の青年も、下の遺書の中の先生も、同じように「私」を繰り返します。

作品の冒頭からそうです。「私はその人を常に先生と呼んでいた。だから、ここでもただ先生と書くだけで本名は

打ち明けない。」。その後も、もつと続きます。「私は……」、「私は……」、「私は……」と、延々と書かれるのです。最初は気になりますが、読んでいるうちに、「私は……」が、音楽で言うテーマの繰り返しとして心に響くのです。それも漱石が作品の効果として狙ったのかもしれない。

「ころ」で繰り返される「私は」の語句には、添削で削れるものはいふんあります。しかし、もし削ったとしたら、何度も繰り返し「私は」とよむときに感じられる作品の魅力がいふん失われるでしょう。

このような文学作品の文章は例外として、とにかく添削では削ることが原則です。前にお話した「エネルギー節約の原理」です。例えば、皆さんが書かれた文章の中でもわたしが削った部分がいふん見られます。Bさんの文章では終りの二行を削っています。「しかし」とありますが、この接続語が意味を持たないので削りました。

「しかし」はクセモノというのが、わたしの教訓です。逆に言うなら、文章の中で正確に「しかし」が使えるようになればしめたものです。むしろいいものです。Bさんは「その葛藤によって自分というものが、自分がしているよりはるかに深く……」と書いていますが、この部分は不要です。その代わりに、「しかし」を使って、「しかし、

自分には不可解で認めたくない要素がたくさんある。」と言いつければすっきりします。

【連載】第26回

●言い切ることの大切さ

困ったことがあります。文章は書き込めば書き込むほどあいまいになってくるものです。たとえば、「何とかのようないふんがするみたいに思われてくるのであった」というような表現があります。いちばんいいのはどこでしょうか。「思うのか、思わないのか」これがポイントです。肯定するのか否定するのか。人は不安があるので、どうしてもこんな表現になります。でも、文章では言い切ることが大事です。ムダを削るといえるのは言い切ることです。それでも、言い切ると不安なので付け足したくなります。「ただし」とか、「しかし」とか、付け足します。

いちばんよくないのは、「何とかのようないふん……」という書き方です。述部で結ばずに「……」をつけます。わたしは必ず文末まで言わせることにします。Eさんの添削で「終りまで言い切る」と指示したのはよい添削でした。このコメントはよいですね。「何を話題として書けばいいのか……。」——これでは意味がありません。文末をきちんと言い切れば、これに続く文が浮かぶのです。「しかし」

なのか、「ただし」なのか、「なぜなら」なのか、「また」なのか、いろいろな文がつながります。

ですから、文末まで言い切ることを、これが文による考えの組み立ての基本です。「何が↓何だ」「だれが↓どうする」という単文で組み立てて、アイマイな文は削ります。これが第一の原則です。

講義レジュメの3(1)の「(1)削る」にある「表現と癖」というのはこのことです。理論文の場合にはそう問題ではないでしょう。しかし、その人のクセなのに面白みの出てしまうダブリが困るのです。この言い回しは書き手が狙ったものなのか、あるいはクセなのか、その判断がむずかしいのです。書き手が狙っている場合もあるのです。ただし、その場合でも、文章をクールに読んで、「あなたは工夫しているようですが、読む人には迷惑ですよ」と判断して、思い切って削るのです。

そのような場合には、先ほど話した「保留」という添削の方法もあります。加えた語句に傍線を引いて、「どうしますか？ この表現でいいですか？ 別の表現もありますよ？」と知らせるのです。あるいは、カッコをつけて書き手に推敲をすすめるのです。これも、添削が書き手に代わって完璧に文章を直すのではなく、共同で文章を仕上げるという考え方です。書き手に再提出させるなら、それが可能

です。それが教育になります。

●ダブリと省略

つぎに二つ目です。文の要素のダブリです。これは削ります。「昔の武士の侍が」とか、「馬から落ちて落馬した」とか、よく例にあがります。それから、主語を入れるか、入れないかの判断です。入れるなら、どこに入れるか、どの位置に入れるかという問題があります。

次にあげた「補足要素の省略と追加」とはこういうことです。文の中で、助詞のついた「……を」「……に」「……と」「……へ」「……で」「……より」「……から」などの要素が省略される場合、あるいは不足する場合です。文がつながるとき、前の文で書かれた要素が次の文で省略される場合があります。あるいは、次の文のどの位置に置くかが問題になります。それを削るか入れるかによって文の表現の意味がちがつてきます。

たとえば、こんな文章です。「私はパンを買った。食べてから学校へ向かった。」——この文の流れでは、主文の「私は」は省略されます。また、最初の文の「パンを」は客文素と言います。これも次の文で省略されています。いちいち「私は」「パンを」と入れたらうるさくなります。要するに、文中にあつて当然の要素は省略しやすいのです。前の文に書かれていれば、なおさら省略されます。これも

エネルギー節約の原則です。その省略をした方がいいのかどうか、これが思案のしどころです。ここに、添削者の読み手としての判断があります。文章読解のセンスが試されるのです。煩わしいと感じるか、なくともいいと感じるかそれが問題です。添削で時間がかかるのは、削るか削らないかと考えるときです。それを繰り返すのでずいぶん時間がかかるのです。

●教育のための添削

学生向けの添削の場合には、完璧な添削は必要ないでしょう。今、私が考えているのは、学生のための添削、大学という場における添削の位置づけです。大学ではどういう添削が成り立つだろうかと考えています。一般の添削の目的は、文章を仕上げて完成させることです。書き手の成長よりも、文章そのものを仕上げるのが目的です。注文した人は、文章が直つてよかったなと文章をよむわけです。また、新聞や雑誌などの添削では、記事が商品として読者に読まれることが目的です。

それに対して、大学の添削では、書き手の能力を高めるという教育が目的です。だから、完璧な添削ではなく、保留をつけて書き直しをさせたり、推敲をさせたりすることに意味があるのです。本人が文章について自覚できるようなコメントをつけることも大切になってくる訳です。前に

述べた※の印しや保留の方法も、その一例です。むしろ、保留とコメントあるいは代替案のついた添削の方が教育効果があがるのです。

【連載】第27回

●添削では何をどう書き加えるか？

今回はレジュメの「3添削の原則と手順」の「(2)加える」についてお話しします。レジュメには、①文と②単語と③接続語の書き加えと二つの項目をあげました。

文を加えるのは、内容の書き込みが不足している場合です。或る文のあとに文を入れないと文がつながりません。文の種類としては、説明、注釈、追加などがあります。わたしが文を書き加えるときの基準としているのは文章展開の四種類です。(澤田昭夫『論文の書き方』講談社現代文庫)

●文章展開の四種類

文章展開とは次の四つです。

①物語、②描写、③説明、④論証

これは論文のレトリックのとして提唱されていますが、あらゆる文章に当てはめることができます。むしろ、論文よりも一般の文章の書き方に広く応用できます。

第一は、「物語」です。時間のながれによる文の展開です。時間の系列でできごとを書きます。「……した。それ

から……した。それから……した。」という文章のつながりです。たとえば、仕事の手順の書き方です。たとえば、料理のレシピです。「初めにこれをして、次にこれをして……」という時間系列で仕事を進めます。それを文章で書いたものが「物語」の展開です。

出来事を時間の順序どおりにていねいに述べてほしいのに、飛躍していることがあります。そのために分かりにくくなります。もちろん、飛躍させた方がいい場合もあります。しかし、「物語」で書く能力の不足のために、飛び飛びにしかなけないのは困ります。また、出来事の順序を入れ替わってしまうのも困ります。まず、出来事を時間の系列にしたがって順序どおりに書くことは基本です。さらに、細かく書くこともできるし、飛躍させた書き方もできる必要があります。

物語の展開の基本は、時間系列にしたがって細かく文章を展開できる能力です。たとえば、テラーシステムの設計などもそうですね。作業工程の管理をする場合には、このような時間系列の細やかな展開を文章で書くことのできる分析能力が必要です。どういう工程で、生産なり管理なりが行われるか、文章に書くことで考えることができるのです。

学校の作文教育では、「それから、それから」という書

き方はアタマから否定されるようです。しかし、まずは時間系列で書ける能力をつけることが基本なのです。というわけで、書かれた文章が飛躍して荒っぽい展開をしている場合には、「物語」の展開の文を書き加えるのです。

●描写とは？

第二は、「描写」です。これは空間的にものを描き出す書き方です。「物語」は時間の展開、「描写」は空間の展開です。ものごとを明確にする場合、説明と描写とがあります。文学的な文章においては重要ですが、一般の文章論では重視されません。理論的な論文においても、事例を取り上げるような場合には描写的な表現が必要です。

たとえば、ある会社には機械が置いてあるとします。機械の配置について文章を書いて考えます。その場所には、機械が何台あるのか。どのような配置になっているか。天井との関係はどうか。床はどうなっているか。目に見えるものについては、説明をするよりも描写をする方がよく分かります。広い意味での説明といえるのです。

目に見えるように示すべきところで、そのものが見えない場合があります。描写不足です。その場合は描写の文を書き加えます。ただ「文を足さない」と指示するのは有効ではありません。「情景が分かるように描写で書きなさい」と展開の方法を示すのです。

●なにを説明するのか？

第三は、「説明」です。論文を例にしましょう。専門的な用語などが出てくることがあります。そのたびに用語の定義をするでしょう。そうしないと、話を先に進められません。

ごく簡単な文章でも説明は必要です。たとえば、「わたしが玄関から外へ出ると山田さんの奥さんと会った。」と書きます。そこで、「山田さんの奥さんというのは……」というように、新しい情報がでてくるたびに説明を加えるわけです。

専門的な論文ならば、用語の定義は繰り返し繰り返し行われるわけです。その場合、「……とは」という書き方が、説明の基本的なスタイルです。いわゆる、「コトバの定義」の表現です。注釈とか、コメントとかいうものです。描写とはちがって、ものが目に見えなくてもよいのです。それが説明です。

【連載】第28回

●「論証」の展開

四つの文章展開のうち、四つ目は「論証」です。これまで話したように、接続語を使った文の論理的な組み立ての事です。

わたしは「たとえば、つまり、なぜなら、……」という接続語を組み合わせた論理トレーニングを工夫しています。これについては論のかたちというものがあります。一般的には三段論法と言われています。これを、わたしをもっと明確な形に組み立てています。論の三段構成です。三段論法はそのままこの形に組み立てられます。

(1) 私は、○○は……であると考え。(意見)考え

(2) なぜなら、……だからである。(理由)

(3) というのは、……だからである。(根拠)

いちばん上が「意見(考え)」です。一段目が、「理由」です。三段目が、「根拠」です。この場合に、接続語が、「なぜなら」と「というのは」とを区別して組み入れていきます。理由も根拠の表現も、「……から」が受けることばになっていきます。こういう構成です。

有名なソクラテスについての三段論法を当てはめると次のようになります。

(1) 私はソクラテスは死ぬと考える。(結論)

(2) なぜなら、ソクラテスは人間だからだ。(小前提)

(3) というのは、人間とはすべて死ぬものだからだ。(大前提)

この展開が中心となって、論が構成されます。これを補助する接続語では、「たとえば」で事例を入れたり、もう

一つ事例を増やすのに「また」を入れたり、論に対立する意見を「しかし」で並べたりして展開をします。

「考え」のあとには「理由」が書かれます。さらに、「理由」につづけて「根拠」が追加されることもあります。ただし、新聞の投書や日常会話では「根拠」は述べられません。「常識なのだからわざわざ言わなくてもいい」というわけです。しかし、学生に論理的な文章を書く訓練をさせる場合には、必ず「理由」と「論拠」まで明確に書かせます。

わたしの文章トレーニングでは、この三段を文章の組み立てのかたちではつきりさせています。常識に乗っている考えの隠れた根拠まで明確にさせるのです。「常識」で済まされている考えが論理づけられるのです。そして、書き手の考えもそれだけ深まるわけです。こうして人は考えを掘り下げられるのです。

「考え」は根拠まで掘り下げたときに明確になります。ある考えについて理由は同じでも論拠がちがうという場合が多いのです。たとえば、「私は胃が悪いので薬を飲んでい」という考えがあるとします。「わたし薬を飲んでい」という場合に、「理由」は「胃が悪いからである」。そう言われると納得しそうです。しかし、論拠はちがいます。いくつか考えられます。「以前に飲んだ時

に聞いたからだ」「医者にその薬を飲むと言われたからだ」「テレビのコマーシャルで見えそうだと思ったからだ」という具合に何通りもの論拠が考えられます。そこまで深められないと「考え」のちがいが明確になりません。

●ディベートと論の組み立て

わたしは何年か前に流行したディベート教育の方法には疑問を感じています。「情報主義」になっています。情報をたくさん集めればそれが論拠になるだろうという考え方がないままにディベートをしています。そのせいでどうか、一時期はずいぶん流行しましたが、近ごろは下火になって廃れつつあるようです。

ちなみに、昭和三十年代の後半、わたしの所属する日本コトバの会では討論指導のためにディベートの理論化と実践を進めた時期がありました。今から考えれば、ずいぶん早い着目でした。今日も、わたしが持参している『コトバ学習事典』（初版1988／2刷1998 一光社）には、ちゃんと討論指導の項目が入れられています。当時は大学対抗のディベートの競技会もあったそうです。その当時から、わたしの師である大久保忠利はディベートに関する論文をいろいろと書いていました。論の立て方についても論じています。

ところが、現在行われているディベートは、論の組み立

てという点が非常に甘いのです。論の組み立てがアイマイなままディベートをしているのですから、論理的な訓練にはなっていない。議論にならないのです。情報の量によって知識の量で勝ち負けが決まる競技になっているように見えます。

【連載】第29回

●単語をどう加えるか

それでは、これから、単語をどう加えるかという問題に入ります。第二点の「不足した文素の追加」についてはすでにお話ししました。「文素のダブリは省略できる」という話をしました。つまり、添削のうちの文章を削る場合の考え方でした。

今度は、必要な要素が文に欠けている場合の問題です。添削のうちの書き加えについてのお話です。この場合の必要な要素とは、それぞれの文の述語が要求する要素のことです。文法的には「補足文素」と言います。具体的には「何を」「何と」「何から」「ダレと」などの要素です。

例えば、「運ぶ」という動詞があります。「私は運ぶ」という文を書いたとき、この動詞はどのような文素を要求するでしょうか。述語が動詞の場合には、まず、他動詞なのか、自動詞なのかという区別が問題になります。他動詞

ならば、必ず「……を」が必要です。他動詞と自動詞との区別は、動作の対象である「……を」があるかないかの問題です。

他動詞では、対象となるものを必要とします。例えば、「食べる」という動詞は、対象であるもの、つまり、パンとか、ご飯とかです。文としたらば、「私はパンを食べる」「私はご飯を食べる」と書かねばなりません。「私は食べる」だけでは、「いったい何を食べるのだろうか？」という疑問がわきます。それに対して、自動詞の場合には、「……を」という対象は必要ではありません。

動詞には、たいいてい他動詞と自動詞とがペアになっています。たとえば、「始める」と「始まる」です。どちらがうかお分かりですか。例文を作ってみるとちがいが判ります。「戦争が始める」とは言えません。「戦争が始まる」となります。これには「……を」は入りませんから、「始まる」は自動詞です。

それに対して、「戦争が始まる」とは言えません。「戦争を」は他動詞「始める」の補足文素ですから、ほかに主語が必要なのです。ところが、自動詞の文「戦争が始まる」では、何か戦争が自然に始まってしまったような印象があります。無責任な感じ。他動詞の文で、「誰かが戦争を始める。」と書けば実態がはつきります。この場合に

は、「ダレが」という主体が明確になるわけです。

わたしには一つの思い出があります。小学生のときのことです。雨の降った日でした。運動場に出られないので教室の中でボールを投げをして遊びました。わたしが友だちに向かって投げたドッジボールを友達が受け止めずに頭を下げて避けたのです。

ボールは窓ガラスに当たりました。それで、わたしは先生のところへ行つて、「先生、ガラスが割れました。」と言ったのです。すると、先生は変な顔をしました。それから言ったことは今でも忘れません。すごい先生です。わたしにこれだけの記憶を植えつけたのですから。

「ガラスが割れたのか？ ガラスは割れるのか？ おまえがガラスを割ったのだろう？ だから言いに来たのだらう」と言ったのです。これは一生忘れません。

この責任問題が、戦争にも当てはまります。「戦争が始まる」と「戦争を始める」とではまったく意味が違うのです。そして、「戦争を始める」の文については、当然、主語である「ダレが」という要素について、明確に意識をして書き込む必要があります。

自動詞と他動詞の区別は、このような意味で大切なのです。これも添削による指導であり、ひろく「作文教育」の目的にもなります。さらに、文章の書き方に限らず、そも

そも、ものの考え方につながる重要な問題なのです。

さらに、能動文と受動文とのちがいもあります。これも、今回の添削の例の中に出てきています。というわけで、添削はとても重要なということがお分かりでしょう。

【連載】第30回

●「文」に何を書き加えるか？

それでは、話をもどして「運ぶ」という動詞について考えてみましょう。この動詞の要求する文素とは何でしょうか。どのような言葉が必要でしょうか。文に必ずあるべきものは主文素と述文素です。文の基本成分です。文にすれば、「わたしが、運ぶ」という形になります。

それでは、そのほかに必要な要素は何でしょうか。それは、動詞ごとに文法的に決まっていますのです。今、日本にはすばらしい文法があります。獨協大学の下川浩さんです。日本コトバの会の運営委員長と会長代行を兼ねています。副学長を務めた人で、専門はドイツ語学ですが、日本語の文法についても造詣の深い人です。この人が日本語の動詞が要求する文素の分類をしています。（注『日本のコトバ』14号に、動詞、形容詞、形容動詞などの補足文素の分類をしています）

日本語のほとんどの動詞、さらに形容詞、形容動詞など

も含めて、用言の要求する文素の一覧表を作成しています。

これはすばらしいものです。残念ながら、日本の文法学会では、その価値が十分に認められていないようです。

●「運ぶ」に必要な文素

さて、動詞「運ぶ」には、どのような文素が要求されるでしょうか。おわかりでしょうか。まず、動詞にはそれが自動詞なのか他動詞なのかの区別があります。これは、どちらでしょうか。

——他動詞です。

そうです。他動詞です。ならば、客文素「……を」が必要になります。英語の文法でいう目的語です。例えば、「私は自動車を運ぶ。」といった文ができます。まだ、ほかに足りないものがありますか。

この文から何が想像できますか。この文について、何か質問したいことがありますか。そう考えてください。この文の意味が成立するために、さらに必要な要素が二つあります。

だれかが手元にある荷物を指さして、「おーい、これ運んでくれ！」と言ったときに、これだけではダメなのです。補うべき要素があるのです。あと二つです。おわかりでしょうか。ヒントになるのは、格助詞の「…を、…に、…と、…へ、…で、…より」です。このうちの二つが欠けていま

す。いかがでしょうか。

——「……に」です。

そうです、場所を示す「…に」が欠けていますね。さらに、もう一つ「……から」も欠けています。「おーい、これ運んで」という場面では出発点が分かっていますから、到着点だけ示せばいいわけです。つまり、ある場面では、「今」「ここ」という状況が設定されていますから、「……へ」「…ないし」「…まで」が示されれば行動できます。場面での暗黙の了解です。

しかし、文章ではそれがありません。文章と話しのちがいです。文章では、暗黙の了解が成り立ちません。ただし、文脈において意味が成立している場合には省略できます。前の文に必要な成分が書かれていれば、同じ要素が省略できるのです。ここでも、文章の流れをしっかり読んでいるかどうか試されるわけです。

添削をする人は、それぞれの文に欠けている要素がないかどうか、欠けているときには、どの要素なのかを考えましょう。

たとえば、「運ぶ」の場合には、「……から」と「……へ」とがあるかどうか、そして、文章の流れからみて、どちらが省略できるか考えます。もしも省略できない場合には、「この要素を入れなさい」とコメントするわけです。

以上が、添削の「添」の第一の方法です。これが書き足しの方法です。

【連載】第31回

●修飾語の書き加え

次は修飾語を書き加える場合です。修飾語には修用文素と修体文素とがあります。

修用文素とは用言（動詞、形容詞、形容動詞）を修飾するもの、修体文素とは名詞を修飾するものです。どちらも一般には文学的なレトリックだと思われていますが、論理的には「限定」です。「みかん」というよりも、「夏みかん」というほうが意味が限定されます。

理論文であっても、アイマイなことば、たとえば「かなり、たくさん」などの修飾が必要な場合があります。ところが逆に、書かない方がよい修飾語もあります。それについては講義レジュメをご覧ください。

「4 添削の細かい技術——表記法など」の「(二) 語句（漢字・かな・カタカナ）」に例を挙げています。これらは意味をアイマイにするムダな修飾語です。たとえば、「……のような」「……という」「……ている」「とても」「大変」「かなり」「非常に」「……と思う」などです。

芥川賞を取った吉本ばななさんに『キッチン』という小

説がありました。わたしは書きだしだけ読みました。こんな風に書いてありました。「わたしが一番好きなのは台所だと思う。」というのです。これでは困ってしまいます。「おいおい、……と思う」なんてあいまいなこと言わないでくれよ」と思いました。

ちなみに、文章というものは、あえて言うなら、すべての文の文末に「と思う」がつけられます。それは文というものが、すべて書き手の判断であるということからきています。

しかし、「と思う」という表現は責任のがれです。政治家がよくやります。「……と認識しております。」「……と記憶しております」といった具合です。こういう表現は文章にははいけません。とくに、自分の考えを明確にするときにはだめです。責任を持って書くのですから、「と思う」というような表現は困ります。この部分は削ります。

みなさんにお返しした文章でも、わたしが削った部分があるかもしれません。「……と思われる」という表現もよくありますね。うっかりすると書いてしまうものです。ほかに、「……のような」「……という」などの婉曲表現も責任の放棄につながります。

今、若い人に流行っている表現があります。「ミルクの方、お下げいたします」とか「お水の方、お持ちいたします

すか」とか言うのです。わたしは、「お水の方ではなく、お水を持ってきてください」と言いたくなります。「……の方」と婉曲に言うことで丁寧な感じがします。しかし、文章の表現では削ってよいのです。

●「遠慮コトバ」を避ける

ほかに、わたしが名づけた「遠慮コトバ」というものがあります。——「少し」「とても」「大変」「かなり」などのことばです。書き手が遠慮しているか、厳密に表現しようとするのですが、読み手にはアイマイな感じを与えます。「ちょっと……」と書いてしまうと、そのあと何か続けて言う必要がなくなります。アイマイに納得して、それで終わってしまいます。考えが停止するのです。

しかし、「……である」とはつきり断定するならば、「しかし」とか、「ただし」とかいう接続語をつけた文がつながります。いわば説明責任が生じて、何か付け足して言いたくなるのです。ところが、「あいつはちょっと元気がなかった」などと言ってしまうと、考えが次に進んで行けません。

また、わたしは話をするときによく使うのですが、「我慢するのですが……」とか、「失礼ですが……」という言い回しです。これは形式的に口に出すだけで、「ごめんなさいね」と儀礼的に謝っているわけです。こんな表現も

会話においては意味があります。しかし、文章においては、文学文でなければ心理的な効果はありません。論理的には自慢をしているわけですから、失礼なことになるわけです。こんな表現も、文章においては、書き手にとっても読み手にとってもエネルギーの浪費になります。

文章では明確に言い切るべきです。自慢なら自慢で自慢してほしいのです。「簡潔明瞭」これが文章の大原則です。「自慢するのですが……」とか言わないで、「自慢します」という方が、話し手の責任が明確です。アイマイに表現することで、明確な判断を逃げているのです。以上のようなアイマイなことばは原則として削ることになります。

【連載】第32回

●語句を取り換える

今度は語句を入れ替える場合です。

あらためて繰り返しますが、添削をする時には、文章を頭からじっくり読んでいくことです。書かれた順に読んでいて、すっきり内容が入ってくるのがよい文章です。これを語句の入れ替えの原則とします。文の入れ替えの原則もこれです。

まず気になるのは、長い修体文素が重なった文章です。「……し、……し、……し、……している私」といった言

い回しです。新聞の投書などで、「……し、……し、……し、……し、……しているこのごろです」という文を見かけます。

これは絶対にやめた方がいい表現です。読み手にとって不親切です。なかなか結論が出てきません。肯定するの可否定するのかわからずに、読んでいかなければなりません。しかも、終わりで意味をひっくり返すこともできます。

前にお話した借金を申し込むときの話し方みたいですが。文章の場合には、目で見ているから先に飛んで結論が分かれます。しかし、話しの場合、聴き手は耳で聞いているからイライラしてしまいます。十秒前の音は記憶から消えるのだそうです。

つまり、文章においても、耳から入る音（オン）を重視するのです。読み手の頭に入りやすい語句の並び方にします。まず、言うべきことを言ってしまうことです。原則として単文で言い切ります。そして、そのあとに必要な内容をつけ加えるのです。

一つ一つの文について語順の工夫をします。耳で聞いて頭に入りやすい文にします。理解しやすい語順の感覚は読み方で訓練できます。毎日、短い文章を声に出して読んでください。たとえば、新聞のコラムです。一日、三分くらいですみます。読み方のポイントは、声に出すと同時に理解しながら読むことです。竹内敏晴さんは、演劇のセリフ

の訓練のために短歌を読み上げる方法について書いています。そのやり方が読みの訓練にもなります。（『「からだ」と「ことば」のレッスン』1998講談社現代新書）

演劇の訓練生に、短歌を読み上げさせます。そのとき、「先のことばを考えるな」という注意をします。短歌は短いものですから先のことばは予想はできます。しかも、よく知られている短歌ですから、下の句まで分かっています。それでも、「考えるな」と言うのです。つまり、声を出す瞬間ごとに、先が分からないつもりで読み上げて行けと言うのです。先の分かったコトバを予想どおり読んでしまうと、表現に空きができると言うのです。このように声と意識とをつなげる訓練です。

さらに、すぐれた文学作品となると、語句や文の論理的なつながりに加えて、心理的、感情的なつながりも表現されています。前にお話した太宰治「駆込み訴え」「きりぎりす」などは、その好例です。

ですから、添削をするために文章を読む読み方が重要なのです。さらさらと文字をよむのではなくて、頭から一語一語きちんと読んでいくのです。そのときの作業の重点は「添削のレベル」として設定できます。レジュメをご覧ください。

大原則として、漫然と文章の全体をながめるのではなく、

どのレベルの添削なのか目標を定めること、そして、大きな部分から小さい部分へと添削を進めるのです。作業ごとの重点目標を定めて、今はどのレベルの添削をしているのかを意識しましょう。そうしないと、出たとこ勝負の添削になってしまいます。

文章を読むときには書き出しがとくに重要です。ゆつくりといねいに読みます。書き出しの数行についてじっくり考えるのです。書き出しにはいちばん時間がかかります。それは、みなさんが文章を書くときと同じことです。書き出しでは結びまで想像して書いているからです。文章の終わりにつながるような書き出しになるかどうかを考えているのです。

「楽屋話」から始まる文章はよくないものです。みなさんの文章の中にもありました。「学生さんのレポート添削のお話を伺い、自分自身の文章を書く力について考えました。真っ先に思い浮かんだのは卒業論文です。」こんなふうに文章を書く動機から始めるのはよくありません。いきなり中心点を指す文章がよいのです。そこに行き着くまでの迷いは最終的には削るべきです。

いい書き出しというのは、こんな文です。「添削という」と真っ先に思い浮かぶのは卒業論文です。「簡潔です。すぐに内容に入れます。読み始めて読み手を引きつけます。

漫才でいう「つかみ」がよいのです。そんな書き出しになるように添削しましょう。

理論文の書き出しには凝る必要はありません。レポートや論文などでは露骨にテーマを書いてしましましょう。

「私はこのレポートで……について何々を報告します。」あるいは、「私はこの論文で……が……であることについて究明したい。」という書き出しでよいのです。確かに文章としては不細工かもしれませんが。それでよいのです。中心テーマが伝わればよいのです。

【連載】第33回

●添削のレベルとは

文章に添削をするときの「着目レベル」については、講義レジュメ「1の(3)」としていただいたいお話しいたしました。

- 4つの段階、4つのレベルがあります。
- 1、文字を直すのか？
- 2、文を直すのか？
- 3、文と文とのつながりを直すのか？
- 4、段落を直すのか？

添削というと表記などの字句直しばかりが問題になります。しかし、それは添削の最終段階でチェックするもので

す。それ以前に、大きなレベルから小さなレベルへ進むという手順をとるべきです。

●段落への注目

理論文ではまず大づかみに段落の構成から見ます。文学文では、文章の頭から、一語一語の表現をていねいに読むのですが、理論文の場合には構造的に読みます。大きいレベルから小さいレベルへと読むという原則が成り立ちます。まず始めに、形式段落ごとに丸数字をつけます。形式段落とは、段落として一文字下げられたところです。この作業は文章の構造を分析する第一歩です。最初、ひと固まりに見えた文章も、段落ごとに分かると全体像が見えてきます。

これはコメントを書くときの呼び名になります。「何段落の何行目の……」として使えます。また、文章を書く指導でも、段落に丸数字をつけさせるとよいでしょう。レポートを出す時には必ず「段落に番号を振りなさい」と言うのです。さらに、「段落ごとに小見出しを付けなさい」と言えば段落の構成が意識できます。「それがこの大学の方法です」という特別なやり方になってもよいでしょう。

小見出しをつけるなどと言うと特別な作業のように思われますが、文章を書くときには、だれもがやっているのです。途中まで書いていつて、今まで何を書いたのかなと考

えます。そのとき、段落全体の内容を小見出しにまとめてみるとよいのです。すると、次に書くべき内容がまとまった形で思い浮かんできます。

日本コトバの会の文章教室では、文章助言の勉強のとき、グループで小見出しをつける方法をとっています。文章を順番に音読する前に、段落ごとの小見出しを確認します。司会者が「二段落の見出しをつけましょう。どなたか言ってください」と言うと参加者がそれぞれの確な小見出しを言います。

小見出しはたいいてい段落の中のキーワードとして拾い出せます。印しつけ作業で丸や線がつけてあれば、その語句から小見出しが選べます。たいいていそれで間に合います。しかし、段落の内容をまとめた語句を工夫しなければならぬこともあります。そんな文章はまとまりのよくない文章です。

段落のキーワード、あるいはテーマについては、作者が意識しなければなりません。それに対して、添削する人は段落ごとの内容をとらえます。そして、段落の組み立てと文章の流れを考えます。そのときに、小見出しが役に立つのです。一つの段落を見たら、「ここの内容は、この小見出しにまとめられるな」というふうに段落のテーマをつかむのです。それをつかんでいないと、添削の方針も決まり

ません。

いい文章ならばテーマがよく分かるように書いています。ところが、困ったことには、「この段落のテーマはどちらだろうか？」と迷うような文章が多いものです。迷った二つの場合があるときに、どちらがテーマなのか決めないと添削はできません。

小見出しをつけると内容が二つに割れてしまう段落があります。一つの段落に二つの小見出しがつけたくなるのです。前半はこの内容なのに、後半はこの内容になるという具合です。その場合には、さっきの改行の記号で段落を二つに割ればいいのです。それも一つの添削です。

段落に小見出しをつけることは、段落ごとのテーマをとらせることです。この読み方が大事です。読みちがいがあると添削の目標が変わってしまいます。そうして、段落の小見出しを並べて読んでみると、文章全体のおおまかな流れはつかめるものです。それで文章全体の見通しができますから、添削もやり易くなります。

【連載】第34回

●広げた文章とプロミネンス

ひとつ細かい技法を紹介しましょう。添削する文章を見るときに、原稿用紙をテーブルの上に上下二段、左右二列

に分けて並べるのです。ちょうど本を見開きで見るように全体が見通せます。ちよつとした工夫ですが、部分的に文章を見ているのとはちがいます。添削の能率があります。

文章の内容をより広く把握できるからです。原稿を一枚ずつよむとは大きなちがいです。携帯端末の小さな画面で文章をよむのと、パソコンの大きな画面でよむときちがいはここにあるのです。文章の全体を見通しながら、各部分を添削することが、よりの確な添削につながります。

みなさんは、本屋で本を買うときに、見開きにして字面を眺めることはありませんか。そして、ぺらぺらとめくって行くと、眺めるだけでも、ある程度、文章の善し悪しに分かります。さらに、部分的でいいですから、小さな声を出して読み上げるとなおさら内容がよくわかります。

わたしは、声を出してよむのが癖になっていまして、文学館などへ行っても、展示作品をつい小声で読んでしまうことがあります。また、電車の中でも、小声で表現よみの練習をしてしまうことがあります。ただし、喉の奥で筋肉を緊張させるだけで、ほとんど聞こえないくらい小さな声です。

ちなみに、黙読をする時でも、人の喉の周辺の筋肉が運動するのです。それが実験によって証明されているそうです。ですから、ほとんど声を出さなくても、喉の緊張だけ

で音声イメージのトレーニングができます。アクセント、プロミネンス、イントネーションなどが明確なイメージになるのです。

文章の理解でとくに大事なものは、プロミネンス（強調）です。ほとんどの文にプロミネンスされる語句があります。文がある種の主張をする場合や前の文の意味を受けて次の文が書かれた場合などには必ずプロミネンスがあります。ですから、黙読するときにも文中のいずれかの語句が強調されるはずで。

次の例でもどんな意味を伝達するかによってプロミネンスの位置が変わります。

「これは一般に知られている事実ではないが、私はあえて言いたいのだ。」

いくつかのプロミネンスが考えられます。前半が前提で後半が主張となつています。まず、「あえて」が強調されます。一つは、「知られている」と「言いたい」との対比、もう一つは、「一般」と「私」との対比です。それぞれ力が入ったものの言い方になります。これがプロミネンスです。

文章を読んでプロミネンスが感じとれるようになると、この人の文章はひと味足りないなどという判断ができます。そのとき、そこに「しかも」を入れたらどうだろうかとか

感じられます。何となくさみしいなというときに、プロミネンスの感覚の助けで書き加えるべき語句が見えることがあるのです。このあたりは文章技術の上級の話です。

以上のような読み方で、わたしはその本を買うか買わないか判断しています。添削のときにも、できるだけ広く字面を見ながら行う方がよいのです。

【連載】第35回

●文と文とのつながり

添削のレベルの二つめは、文と文とのつながりを見ることです。目の付けどころは、接続語のチェックです。文中に接続語が出てきたら必ず四角でくくって確認してください。よく見かけるのが「そして」です。これを使った文章はたいていダメです。たいてい要らないので削ります。

ところが、うまいものもあります。漱石などは「そして」という接続語をうまく使っています。なにか述べておいてから、間があつて「そして」となります。いいところを使うのです。

「そして」が出てくるのは、先ほど話した四つの文章展開のうち、「物語」の場合です。さまざまな事態が順々に起こつて、最後に「そして」と決まるような場合には生きた表現になります。

●十一種類の接続語

接続語の種類については、わたしが接続語を十一種類にまとめた「接続語の論理的機能一覧」をご覧ください。二〇〇二年にまとめました。これを考えたきっかけは、中学校の塾で教えているときのことです。接続語の相互の関係をわかりやすく示せないかと思ったのです。最初はもともと単純な図式でしたが、それを二〇〇年ほどかけてまとめました。

文章の論理的なながれが的確かどうかを確かめる判定方法があります。文と文との間に省略された接続語を入れてみるのです。それによって文のつながりがうまくいっているかどうかわかります。

ほとんどの文と文との間に、十一種類の接続語のうちのどれかが入ります。文章のながれがよいときには、接続語は省略されるので書かれていません。しかし、何らかの論理が生きて働いています。だから、文章がつながっていると感じられるのです。そのつながり方は接続語で証明できます。

文と文との間に、的確でない接続語が入ると、論理が乱れてしまいます。例に上げた接続語の「だから」と「なぜなら」とはペアになっています。

先ほど問題を出したまま答えを言いませんでした。あら

ためて問いかけます。「だから」の反対は何でしょう。

「……だから……」、この表現を逆に書き換えたらどうなるでしょうか。もうお分かりですね。「なぜなら」になります。

●対立する接続語の関係

文章の添削ではこのような逆の表現を入れ替える場合があるのです。つまり、「理由を先述べて結論をいうか」、「結論を述べてから理由をいうか」という二つの選択です。

理由が先なら、結論を「だから」でつなぎます。結論が先なら「なぜなら」でつなぎます。この二つの接続語は対立します。

また、「事実」について語る場合には、「すると」と「しかし」が対立します。前のことと後のことが自然につながる場合には「すると」です。それに対立するのは「しかし」です。「しかし」は、その前後の内容が逆の関係にあるのだと言われますが、そうではありません。前の文から想像されることが後の文でひっくり返る場合に、「しかし」を使います。

ほかには、「例えば」が具体化、「つまり」が一般化、この二つも対立する組み合わせです。二つの内容が対等の関係で比べられる場合には「に対して」となります。そして、「もし」が仮定、「（する）ため」は目的です。これ

も。ペアの組み合わせです。

ほとんどの文と文との関係が、この十一通りでカバーできるだろうと、わたしは考えています。いわば、この十一通りの接続語をマスターすれば、論理的に話をしたり、論理的なつながりを持った文章が書けようになるのです。

さて、時間が来ました。以上で、今日の話を終わりにして、次回は各論として、技術のさらに添削の細かい点についてお話しをする予定です。

(二日目終了)

あとがき

この小冊子は、2006年4月29日から、2008年1月21日まで35回、インターネットのブログ「Blogことば・言葉・コトバ」に連載した「文章力を高める文章添削法入門」に手を入れてまとめたものである。もともになったものについては、はじめに述べておいた。現在、日本では添削、あるいは推敲について書かれた本はほとんどない。その意味で、この冊子は価値あるものだと考えている。

(渡辺知明)

文章思考力を高める添削法 —大学生のための添削指導—

2009年1月28日 第1刷 発行

頒価1,000円(送料共)

著 者 渡辺知明
発行者 コトバ表現研究所
発行所 品川区東五反田2-15-6-515
〒141-0022 電話&FAX. 03-3445-6499
w-tomo@tokyo.email.ne.jp
<http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>